

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈7〉

土 塩 西 大 久 保 遺 跡

1 9 9 8

松井田町埋蔵文化財調査会

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈7〉

土 塩 西 大 久 保 遺 跡

1 9 9 8

松井田町埋蔵文化財調査会

序 文

群馬県の南西部に位置する碓氷郡松井田町は、古くより交通の要衝とされ、それ故に町の歴史も交通史とともにあると言っても過言ではありません。万葉集に「宇須比の坂」と歌われた碓氷峠を越えるために人々が費やした労力は計り知れないものがあります。戦国期の国盗りの戦路、また、江戸期の五街道である中山道を経て、近代には重要文化財となっているアプト式の鉄路が開通しました。その後は自動車交通の発達によって道路の整備が進み、平成5年に上信越自動車道が開通しております。また、先頃にはJR信越本線の横川・軽井沢間（碓氷線）が104年の歴史に幕を下ろすとともに、北回りの新幹線が開業して話題になったところでもあります。このような目まぐるしい変化の中、私達は常にその歴史を踏まえ、時代に流されない目で現在から未来を見てゆくことが必要でありましょう。

さて、ここに報告する「土塩西大久保遺跡」は、工場建設に先立つ発掘調査で発見された縄文時代中期の遺跡であります。土塩地域では以前から縄文期の遺物が数多く発見されておりますが、正式な発掘調査は今回が2例目であり今後の調査が待たれるところと言えます。数千年前にこの地を生活の舞台としていた縄文人が、何を考え、またなぜここへやってきたのか、現代の私達には判りませんが、そんな思いを巡らしつつ地域の歴史に触れてみることも必要ではないかと思えます。本報告がその一資料として、広く活用して頂ければ幸いです。

最後に、調査に快く協力して頂いた(株)タイガー工業様をはじめ、調査に従事された方々や関係各位に感謝を申し上げます、序文の締め括りといたします。

平成10年3月

松井田町埋蔵文化財調査会
会長 内 田 武 夫

例 言

- 1 本書は(有)タイガー工業松井田工場建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字土塩字西大久保601番地他に所在する。
- 3 調査は、(有)タイガー工業の費用負担により、松井田町埋蔵文化財調査会が実施した。
- 4 調査面積は1,754㎡である。
- 5 調査期間 発掘調査 平成7年7月20日～平成7年9月12日
整理作業 平成9年4月1日～平成10年3月31日
- 6 現地調査及び本書の執筆・編集は、調査会事務員 田口 修（町教育委員会主任）が担当した。
- 7 整理作業では、田口のほか佐藤友江、田中直美、中里徳子が従事した。
- 8 出土遺物、資料類は当調査会の依頼により松井田町教育委員会が一括して保存している。
- 9 発掘調査参加者（敬称略）
岩井道子、浦野美奈子、神戸数子、佐藤いと、佐藤友江、鈴木百合子、田中直美、野田絹子、
野田貞雄、野田達也、廣瀬君江、矢野由利子

凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は1：20である。
- 2 遺構実測図の方位記号は磁北を指す。
- 3 遺構実測図の断面基準線は海拔標高を示す。
- 4 遺物実測図の縮尺は基本的に1：4、1：5とし、図中に記した。
- 5 遺物実測図（石器）に使用したトーンは以下のとおり。
縦線：石斧の摩滅部 網点：磨石類の磨面 斑入組点：煤付着部
- 6 出土土器観察表中、「○転」の表記は施文原体の回転方向である。
- 7 遺物写真の縮尺は不統一であり、実測図を参照されたい。
- 8 本文と写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序 文

例 言、凡 例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の経過	3
第1節 発掘調査	3
第2節 整理作業	3
第4章 検出された遺構と遺物	5
第1節 概 要	5
第2節 遺物集中部	5
第3節 土 器	8
第4節 石 器	17
第5章 ま と め	27
第1節 細野原と西大久保遺跡	27
第2節 土器について	27
第3節 石器について	28
写真図版	
抄 録	

図版目次

図1 位 置 図	1
図2 周辺遺跡分布図	2
図3 グリッド配置図	3
図4 全 体 図	4
図5 基本層序	5
図6 遺物集中部1（上面）平面図・断面図	6
図7 遺物集中部1（下面）平面図・断面図	6
図8 遺物集中部2 平面図・断面図	7
図9 出土土器（1）	9
図10 出土土器（2）	10
図11 出土土器（3）	11
図12 出土土器（4）	12
図13 出土土器（5）	13
図14 出土石器（1）	18
図15 出土石器（2）	19
図16 出土石器（3）	20
図17 出土石器（4）	21
図18 出土石器（5）	22
図19 出土石器（6）	23

表 目 次

表1 出土土器観察表（1）	14
表2 出土土器観察表（2）	15
表3 出土土器観察表（3）	16
表4 出土石器観察表（1）	24
表5 出土石器観察表（2）	25
表6 出土石器観察表（3）	26

写真図版目次

図版1 表土除去作業・遺跡地遠景（北より）	
図版2 覆土除去作業・平面精査作業・遺物集中部 精査作業・測量作業・遺物集中部1	
図版3 遺物集中部1・遺物集中部2	
図版4	
図版5	
図版6	
図版7	
図版8	
図版9 石器37～42（表面）・石器37～42（裏面）	
図版10 石器43～49（表面）・石器43～49（裏面）	

第1章 調査に至る経緯

平成6年8月、(有)タイガー工業（以下、業者という）より松井田町に開発事業についての事前協議がなされ、翌平成7年3月に松井田町に開発についての計画協議書が提出された。これを受けた松井田町教育委員会（以下、教委という）は、埋蔵文化財確認のための調査が必要である旨を意見するとともに、同月に業者と現地を確認し、隣接地が遺跡地（土塩下原遺跡）であることと、確認のための試掘調査が必要であることを指摘した。4月に至り、業者より教委に試掘調査依頼書が提出され、これにより5月に教委で試掘調査を実施した。この結果、開発区域の北側を中心に縄文時代中期の遺物包含層が存在することが判明した。教委は遺跡発見の通知を文化庁に提出するとともに業者に結果報告を行ない、埋蔵文化財保護のための協議を進めることとした。

協議のなかでは、開発の計画変更は基本的には不可避であり、発掘調査による記録保存の範囲が主な論点となった。区域は北から南への傾斜地で、用地造成のための切土と盛土の境界がほぼ北南の中央となるため遺物が多く検出された北半部が削平される計画であった。このため、この北半部を調査の対象とすることになった。また、開発事業が緊急性を要することから、調査は教委に事務局をおく松井田町埋蔵文化財調査会（以下、調査会という）が実施することで合意に達した。この後、関係法令に基づく届出手続きを経、業者と調査会とで平成7年7月14日付「埋蔵文化財発掘調査契約書」が締結され、7月20日より調査を開始することとなった。

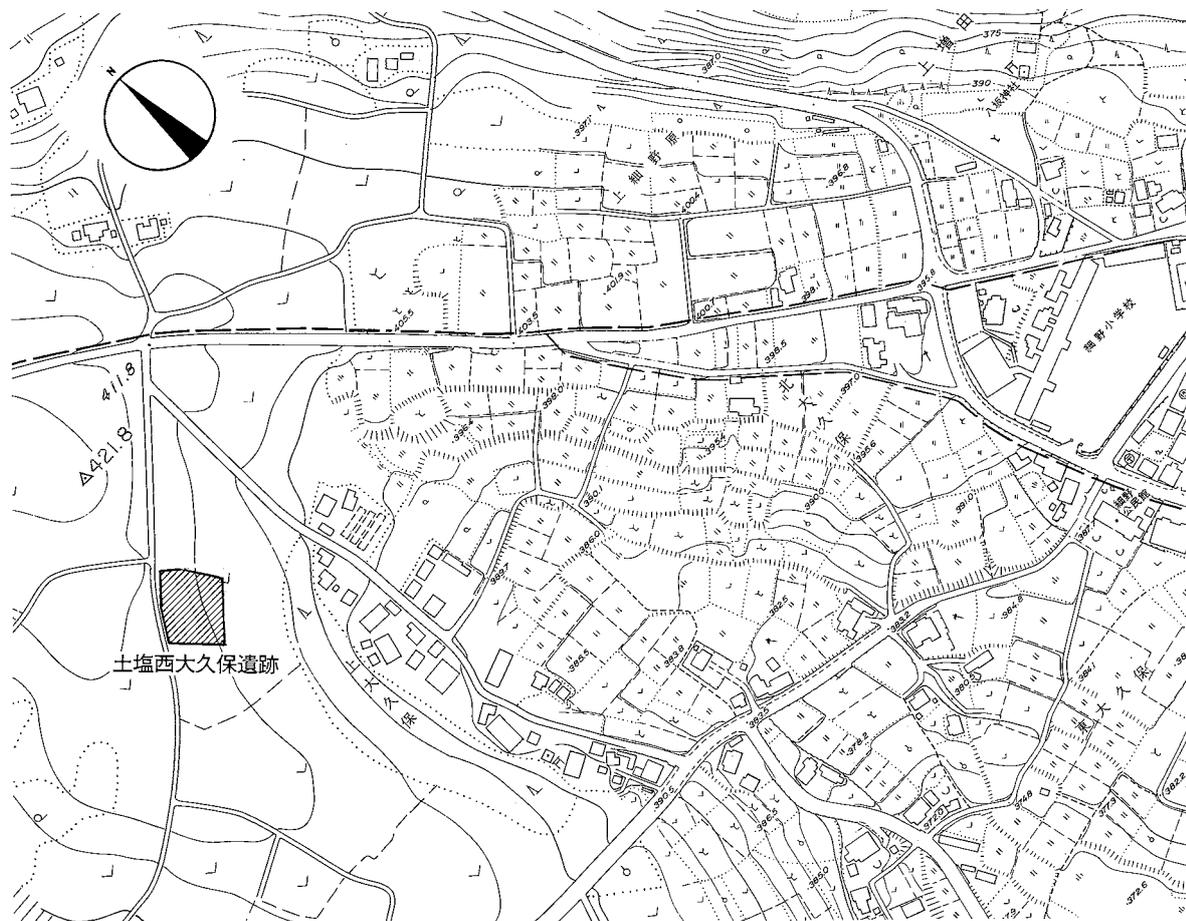


図1 位置図 (1:5000)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

本遺跡は松井田町大字土塩字西大久保に所在する。ここは北西約3kmに位置する高戸谷山から南東方向に延びる丘陵上にあり、北東を流れる増田川より70m、南西の九十九川とは100mの比高差をもつ。標高は410～413mで「細野原」と呼ばれる本丘陵の中央よりやや南面側に位置している。遠方に目をやると、南は九十九川の向こうに霧積山から派生する松井田丘陵、西は高戸谷山の背後に続く連峰とさらには浅間山、北は増田川を挟んでやはり霧積山から続く地蔵峠の山並が、また東は緩傾斜の台地が九十九地区まで続く様子が眺望できる。

本地域は昭和28年からの用水路工事が進んだことで、それまでの畑作とともに水田耕作が盛んになり、厚く堆積する黒色土を利用した肥沃な農地とされてきている。しかし近年では、農業政策の不振と後継者不足から、台地中央を縦貫する道路に沿って宅地化を中心とした開発が進んでいる。

第2節 歴史的環境

付近には旧石器及び弥生時代の遺構遺物は確認されていない。若干、古墳や中世の板碑が分布するが、ここでは紙面の関係上縄文時代に限って以下のとおり提示する。

1から6までは表採や工事中に確認されたもので、発掘調査されたのは7のみである。1.土塩東大久保：昭和35年の開田時に前期関山式土器が出土。2.土塩東大久保：昭和33年に中期加曾利E式土器のほぼ完形品が出土。3.新井上原：昭和32年、中期勝坂式土器が出土。4.土塩畑中：昭和49年の道路拡幅の際に後期堀之内式土器完形品が出土。5.上増田上細野原：昭和31年に後期加曾利B式土器が出土。6.土塩長久保：中期を中心とした遺物が多く確認されている。7.土塩下原遺跡：平成3年に発掘調査を実施し、中期加曾利E式期の住居跡や遺物類が検出されている。なお、1から5付近一帯においては、第1節で述べた用水路工事中に中期を中心とした住居跡や遺物が多く確認されている。

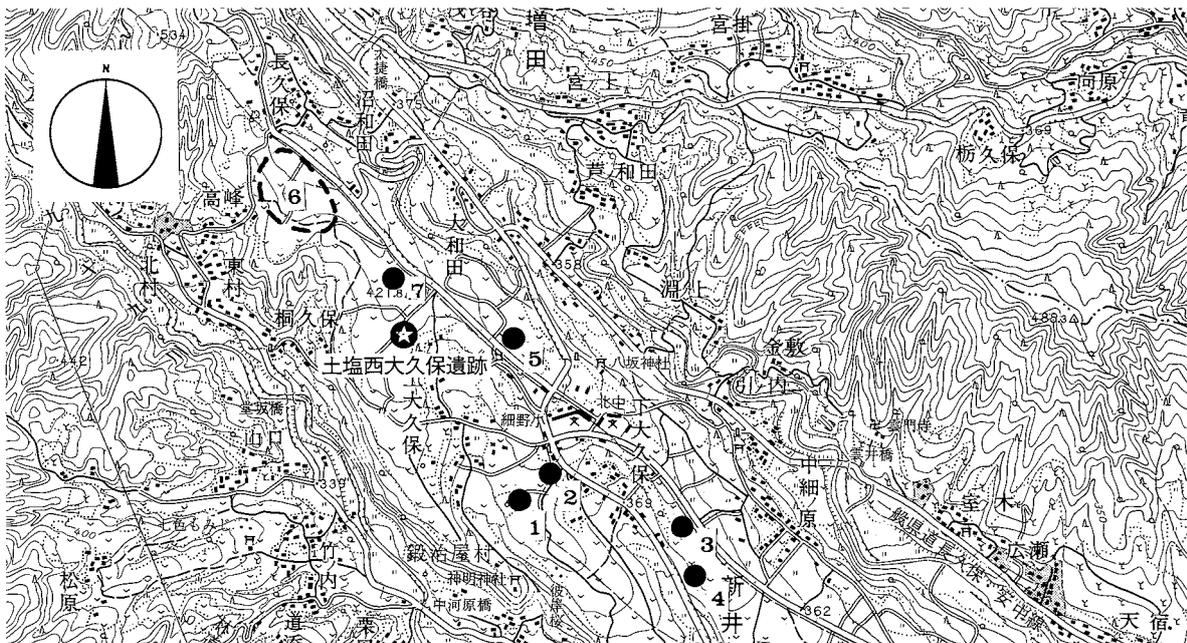


図2 周辺遺跡分布図 (1 : 25000)

第3章 調査の経過

第1節 発掘調査（平成7年7月20日～平成7年9月12日）

7月20日より重機による表土除去を開始。7月25日からは作業員による平面精査を始めるとともに基準杭の設置に取り掛かる。グリッド間隔は10mとし、軸は試掘時のトレンチにあわせて任意方向とした。遺物の取り上げではこの10mグリッドを4分割し、5m四方グリッドごとにナンバリングした。レベルについては北接地の三角点より10mメッシュの各グリッド杭に移設し使用した。8月1日より等高線（20cmピッチ）の測量を開始。翌2日からは平面精査面より下位まで遺物が入り込むグリッドの面下げを始め、7日からは大量の排土を運搬するためにダンプキャリアを導入して作業の効率化をはかった。8月終盤からは遺物集中部の精査及び図化を進め、9月に入って調査地全域のレベルング、セクション図の作成等を行なった。作図では全体の平面を1：100、セクションを1：20とし、遺物集中部では遺物片を表現しうる1：10の縮尺とした。記録写真はカラーネガ、モノクロ、リバーサルの3種でいずれも35mmフィルムを使用した。9月12日、最終の図化及びテントや道具類を撤収して調査を終了した。

調査期間中は開発事業担当者や地元の区長、近隣の方々等が見学に訪れている。調査工程上、現地説明会の実施には至らなかったため、見学者には極力説明をして文化財の公開、理解に努めた。

第2節 整理作業（平成9年7月1日～平成10年3月31日）

発掘調査終了後、事情により約2年を経て整理作業を開始。7月は遺物の洗浄及び注記に終始する。8月より接合・分類を並行して行なう。8月末からは復元できた土器と石器（凹石）の実測を始め、およそ年内

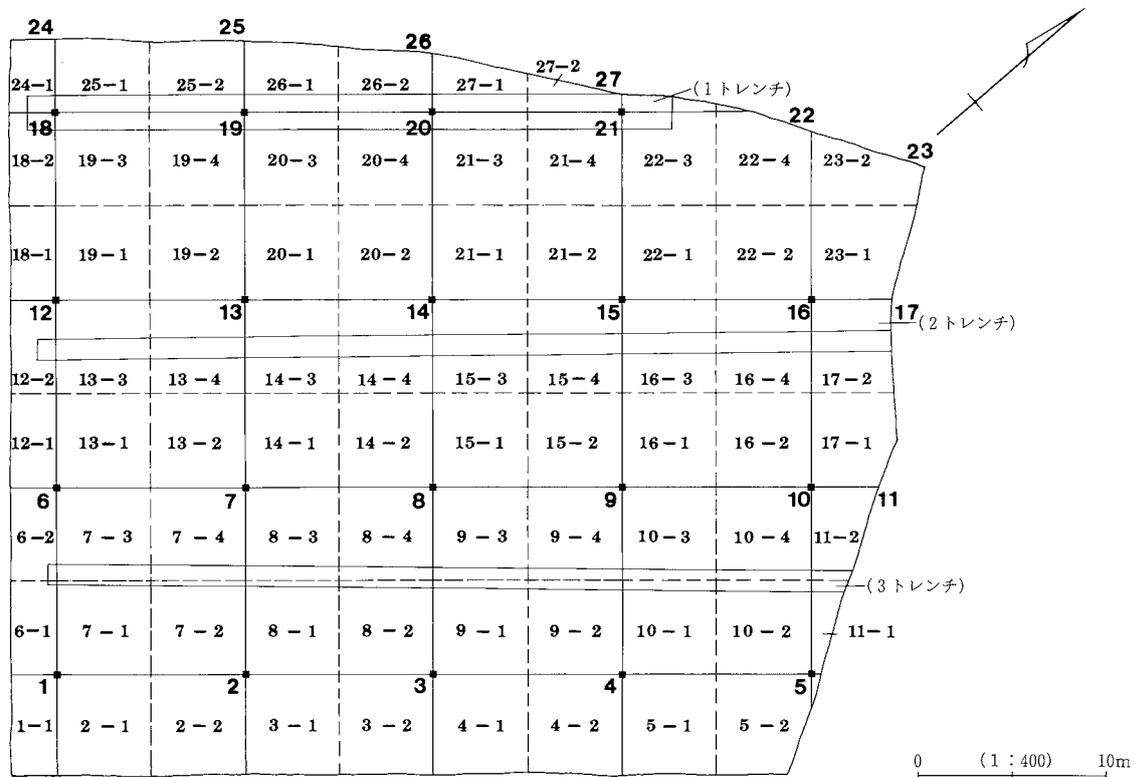


図3 グリッド配置図

いっぱいを費やした。10月からは土器片の拓本及び断面実測とともに現場図のチェック、また遺物観察表の作成にとりかかった。11月～12月は断続的な作業となり、翌平成10年からは遺物図のトレースや版下、文章原稿の作成を始めた。2月に入り遺物写真の撮影、最終原稿の作成等を経て3月初旬に脱稿。更正終了の後、報告書の刊行となった。

整理作業は当初は平成9年9月末日をもって終了する予定であったが、緊急の発掘調査や事務所移転等に伴う諸作業のため、結果として大幅な遅延をきたすことになった。このことについて、ご迷惑をおかけしたにもかかわらず、ご理解をいただいた(有)タイガー工業様に、この場をお借りして深く謝辞を申し上げたい。

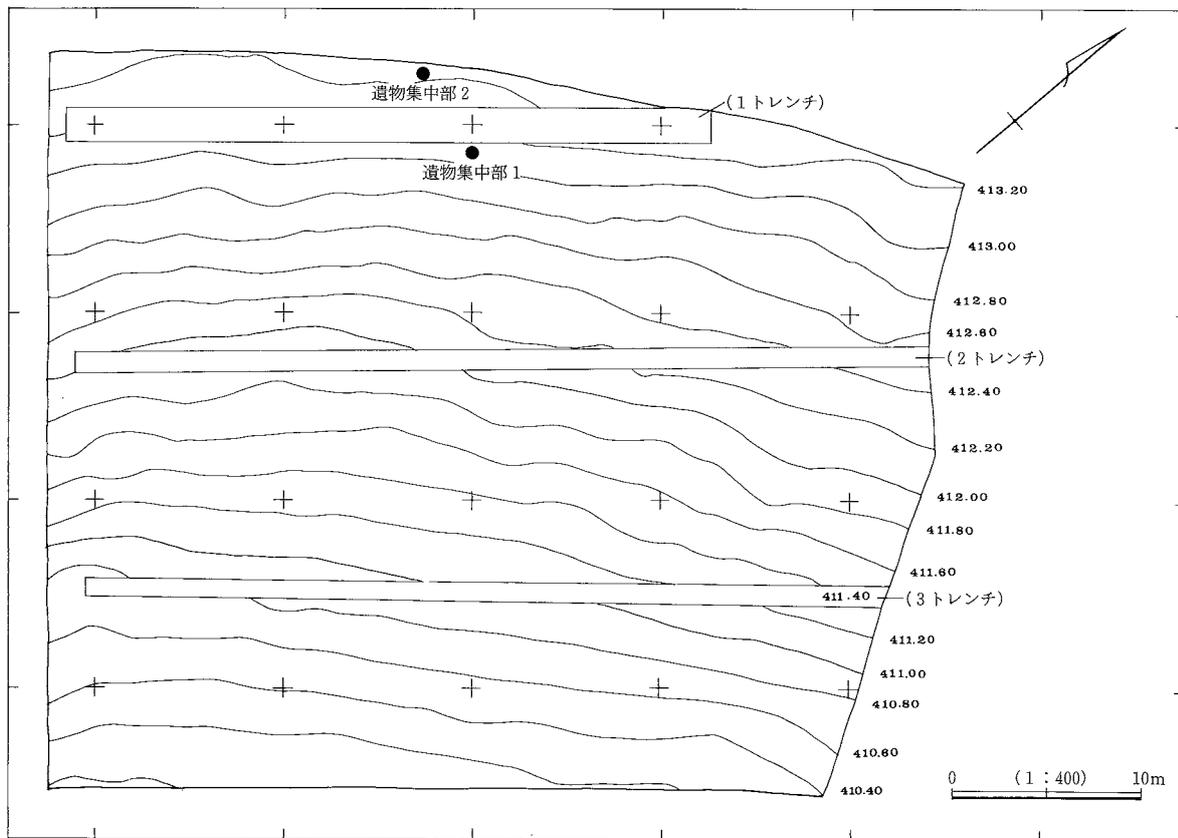


図4 全体図

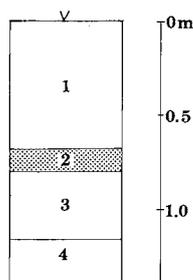


図5 基本層序

基本層序模式図を左に示す。

- 1：耕作土（表土）。浅間A及びB軽石多混灰黒色土でしまりなし。
- 2：浅間B軽石自然純層。調査区北西部（高い方）1／3程では削平されており、南東部（低い方）では厚く堆積する。
- 3：上位に浅間C軽石らしき白色軽石を含む暗黒色土でよくしまっている。
- 4：しまりのよい暗褐色土。遺物出土層。

・A：天明3年（1873）降下とされる。・B：天仁元年（1108）降下とされる。・C：4世紀中頃（古墳前期）降下とされる。

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

本遺跡は「遺物包含層」であり、遺構とされるものは全く検出されていない。遺物は99%以上が縄文時代中期後半に属するもので、ごく一部に前期に該当する土器片が見られた。遺物を種別で見ると土器（片）が大半を占め、微細片を除き、また同一個体片を一つとしてカウントして約11,250個（片）である。石器では打製石斧が76点（欠損品を含む）と最も多く、以下は磨製石斧1点、凹石・敲石・磨石等が合計13点、石鏃3点となっている。これらの遺物は全てが前ページの基本層序の第4層からの出土で、厚さにして20cm程度の範囲に収まる出土状況を示している。平面的には多少の粗密はあるがほぼばらついた状況で、後述するような遺物集中部が2箇所検出されたのみであった。

以上より、本書では「遺物集中部」を2箇所、他は土器及び石器類の提示となる。遺物の提示は本来ならば全てを掲載するべきであるが、先述のように点数が非常に多く、限られた紙面でこれらを盛り込むことは不可能である。よって、以下の観点より点数を絞り込んで掲載することとする。

- ・文様、形態の特徴をよく示しているもの（土器）
- ・残りがよく、また復元実測が可能なもの（土器、石器）
- ・中期後半に属さないもの（土器）
- ・その他

第2節 遺物集中部

遺物の分布は全体的には調査区の北西側（高い方）に多い傾向があるものの、明確なエリアとされる状況はない。その中でも「集中部」として以下2箇所を提示する。集中部1は区域中で最も遺物がまとまっていた部位であり、近接のトレンチまで及ぶものである。集中部2は単一の土器が潰れた部位を中心として付近にも遺物が散乱する状況であった。以上を「遺構的なもの」として述べてゆく。

①遺物集中部1（20-4G～21-3G）

図3ではNo20杭のやや下にあたり、2.5m×1.5m程の範囲に遺物が集中して検出された。遺物は土器片を主体として石斧、凹石、石鏃（?）等があり、出土レベル（範囲）は約30cmの同一層中である。覆土には炭化物粒が他より多く含まれており、当初は住居もしくは土坑の可能性が考えられたが、最終的には掘り込みプランは全く検出されなかった。遺物のあり方にこれといった規則性は見られず、強いて言えば僅かな凹みに遺物や礫が廃棄されたもの、という感じを受ける。ここでは土器片類を除去した再下層より、板状剝離の石がある程度のまとまりで検出された（図7のトーンで示すもの）。石を観察してみたが、被火の痕跡や加工痕、また焼土や掘り方等、人為性を示すものはなく、上層の遺物との関係についてもはっきりしない。

図示した遺物は全部で16点である。土器（図9～13）は4、5、7、11、14、15、20、54、56の9点で、このうち14と15（同一個体）は図6に示した土器片の多数を占めるもので、ほぼ1箇所に集中し潰れた状況であった。石器（図14、17、18）は1、2、3が打製石斧、34が石鏃（?）としたもの、37、38、39が凹・敲・磨石の類であり、計9点である。このうち敲／磨石とした39のみ側縁の大半が煤けて黒くなっている。先述のようにここでは火の痕跡が認められていないことから、この遺物の被火は別の場所であったと言える。

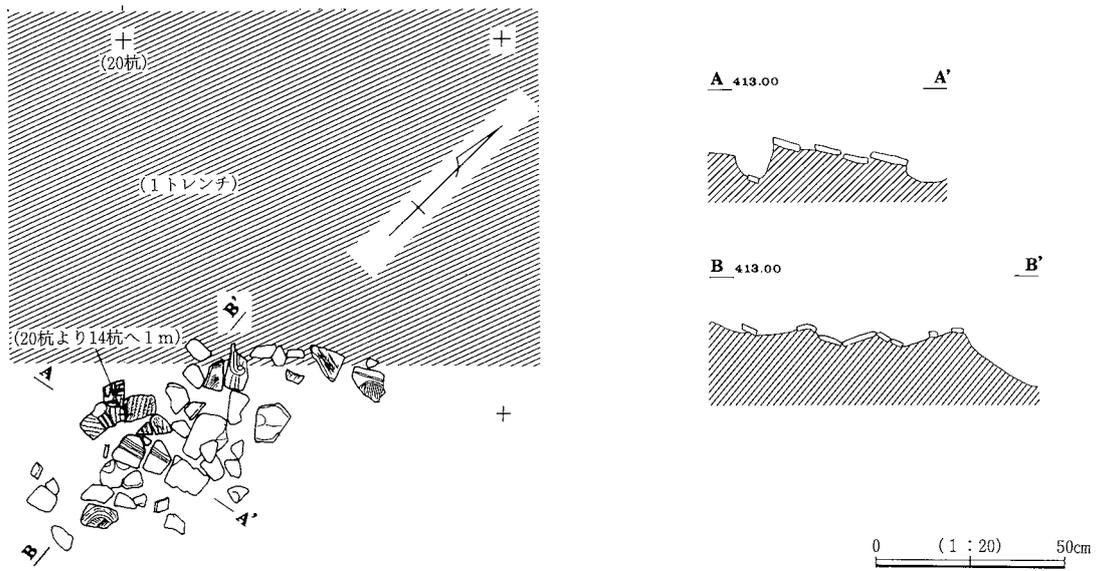


図6 遺物集中部1 (上面) 平面図・断面図

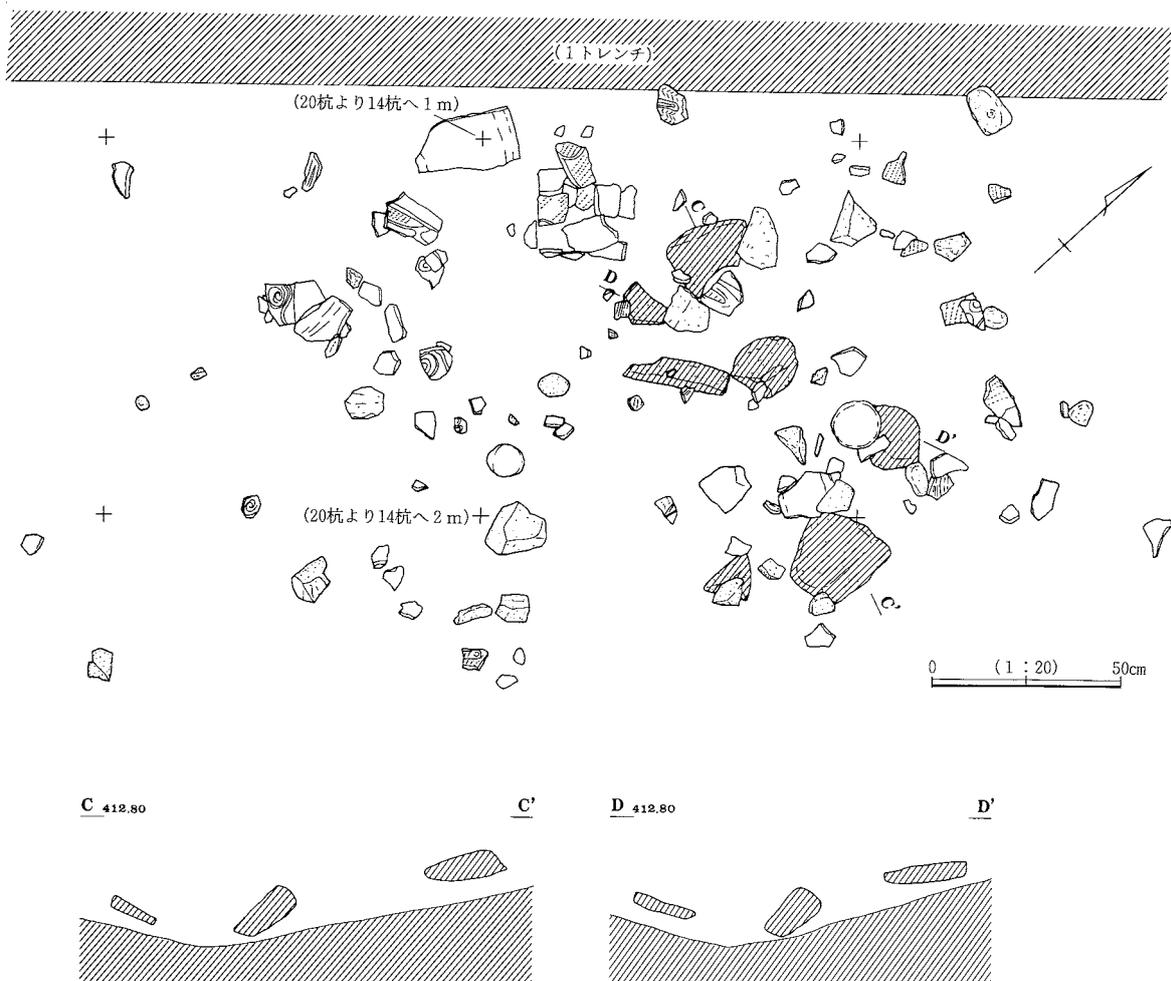
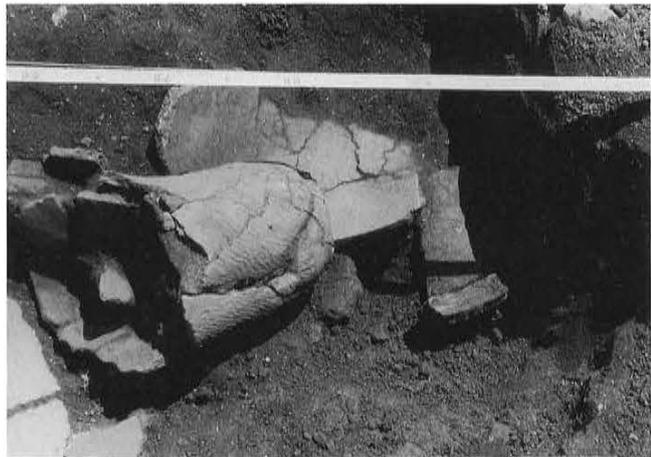


図7 遺物集中部1 (下面) 平面図・断面図

②遺物集中部2 (26-2G)

図3の26-2Gで発掘区域端部付近である。ここでは潰れた土器が低い南東方向へ倒れ込む状態で出土したものと共に、付近より土器片と石器片が少々のみで検出された。集中部1と同様、遺構とされるプランヤ焼土等は伴わず、遺物のみの集中部である。

図示した遺物は6点で、土器(図9、13)が1、2、3、55、61の5点、石器(図14)は4(打製石斧)である。土器は完形に近い2と大型深鉢の1、口縁片の3が近接し、いずれも加曾利E期前葉の特徴を有するものであった。1と2を見ると、横倒しになっている2の底部側の下に1の口縁部が入り込み、2の口縁側に1の口縁~胴部片が散らばっている。1の破片を接合したところ、胴下位~底部は全く無く、下部の割れ口は一部を除き平坦であった。このことより、一つの可能性として、底部の無い1の中に2が入っており、2つが倒れた状態と見ることもできる。この場合、1は正置状態であったろうが、いずれにせよ2つがセット関係であった可能性も考えてよいと思われる。



遺物出土状況

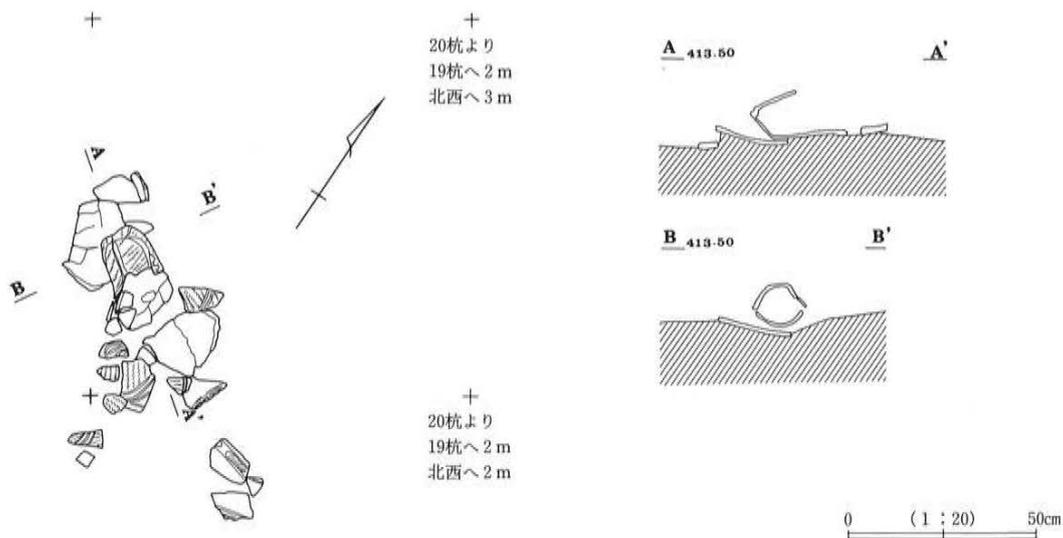


図8 遺物集中部2 平面図・断面図

第3節 土 器

第1節で述べたように、土器片は約11,250点程出土している。本節ではこのうちの64点を掲載した。分類にあたっては、第1節の観点によって時期、部位で大別した。また、図として掲載しなかった「赤色塗彩土器片」については本節の最後で触れることにする。

①時期による分類

加曾利E式期の土器が殆どを占めており、E I期から終末のE IV期までの特徴を示すものが見られた。またごく一部に、前期に該当する繊維土器（黒浜式か）と、繊維を含まない諸磯a式土器が含まれていた。

加曾利E I期としたものは図9及び図10（1～15）である。頸部無文帯をもつもの（1、3）、口縁部が無文のもの（2、6?）、胴部地文中に沈線文（1、2、4、5）や隆帯文（6、7、8）が施されるものなどがあり、7と13は撚糸地文である。また11、14、15は曾利式土器にあたると思われる。

加曾利E II期としては図11—16～24が挙げられる。口縁部及び胴部の無文帯が消滅し、胴部に磨消帯が発生しており、かつ磨消帯は個々が独立し端部の繋がりが見られない。16～18、21、22は縄文地文の胴部に沈線で磨消帯が垂下する。24は地文が条線となっている。また23は縦位の撚糸文の胴部に弧線を連ねる連弧文土器で、本段階に特有のものである。

加曾利E III期は図11—25～32及び図12—33～34である。IIIではIIでの口縁区画が崩れはじめ（27）渦巻モチーフが楕円文に独立するもの（25）が見える。また、磨消懸垂帯の単位が増加する傾向（26、29など）や、微隆起で器面に渦巻文を作出するもの（28）がある。30～33は地文を沈線によるレンズ状文や条線等とし、その中に磨消帯をもつものである。34は有孔罅付土器で口縁が括れる小型甕である。

加曾利E IV期は図12—35～41である。口縁部文様帯が消失し、狭い無文帯が沈線で区画されるもの（35）や微隆起によるもの（38）がある。胴部では、J字状文を磨消帯と組み合わせた36や37が特徴的であり、断面三角形の微隆起で区画されるもの（40、41）もある。

加曾利E式期以外では、図13—62～64を前期の土器として掲げた。62と63は胎土に繊維を含むもので前期前半に属すると思われる。64は繊維を含まず、細かな波状口縁や文様構成より諸磯a式にあたる。

②部位による分類

便宜上「把手及び突起部片」、「圧痕のある底部片」に分類した。これらはおそらく殆どが加曾利E期に属すると思われるが、細分がしづらいために特徴的な部位として分類してある。

把手及び突起部片は図12—42～54に示した。殆どが渦巻を意識したものであり、形態の一部ないしは全体が渦巻状となっているのは42～45及び48、沈線や凹状で表される47、48、50～53、隆帯による49、54などがある。46は蕨手状の沈線が描かれている。

底部片は百数十点（片）出土し、このうち明らかに外面に圧痕の認められるものは6点（図13—55～60）、その他大多数は圧痕類が認められない（または不明）ものであった。6点のうち、編物痕は55～58の4点（いずれも網代痕と思われる）、59と60は木葉痕が認められた。

③その他

その他として、図示したものは図13—61の1点のみである。無文で内外面ともよくミガキがなされ、補修孔と思われる穿孔部が認められる。

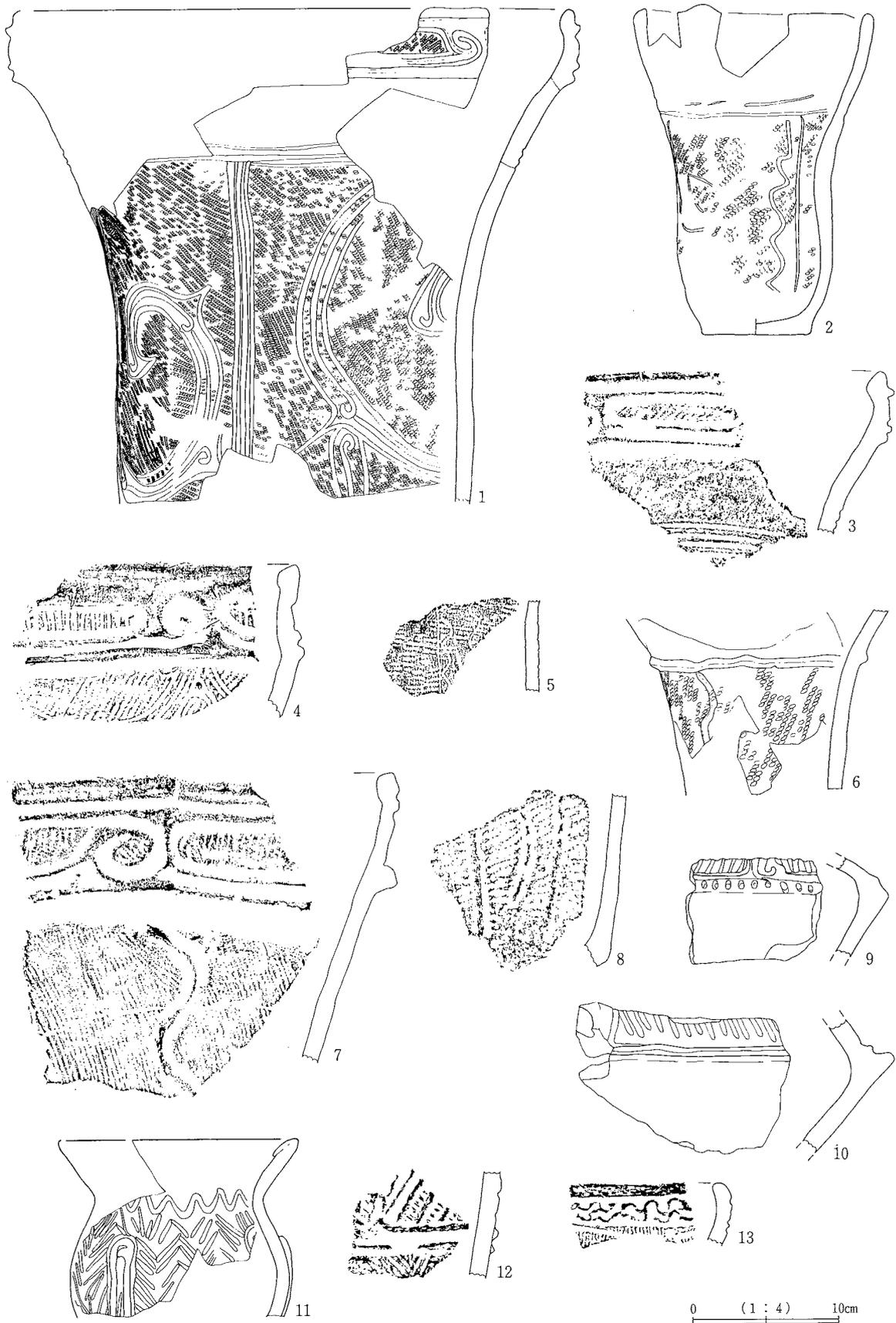
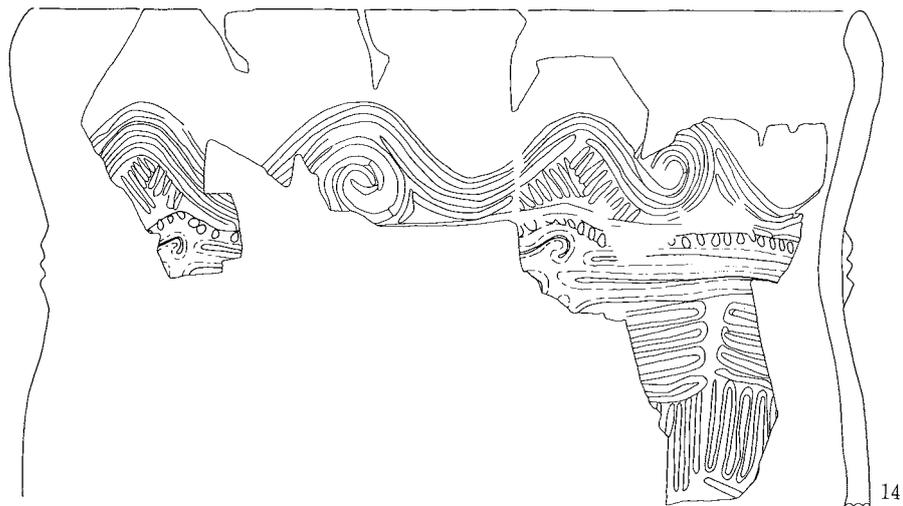


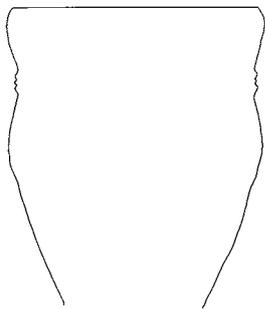
图9 出土土器(1)



14



15



(復元図)

0 (1 : 4) 10cm

图10 出土土器 (2)

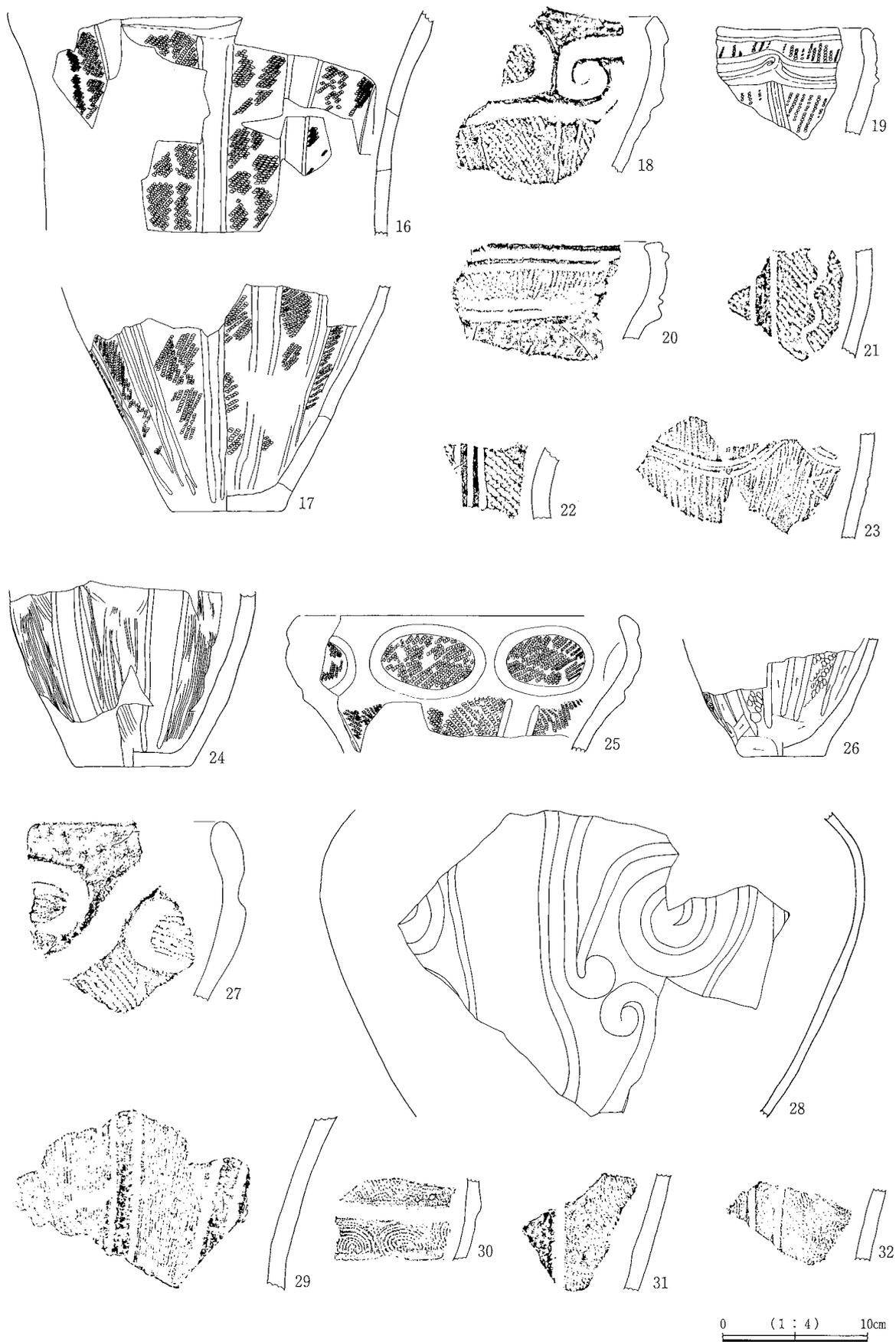


图11 出土土器(3)

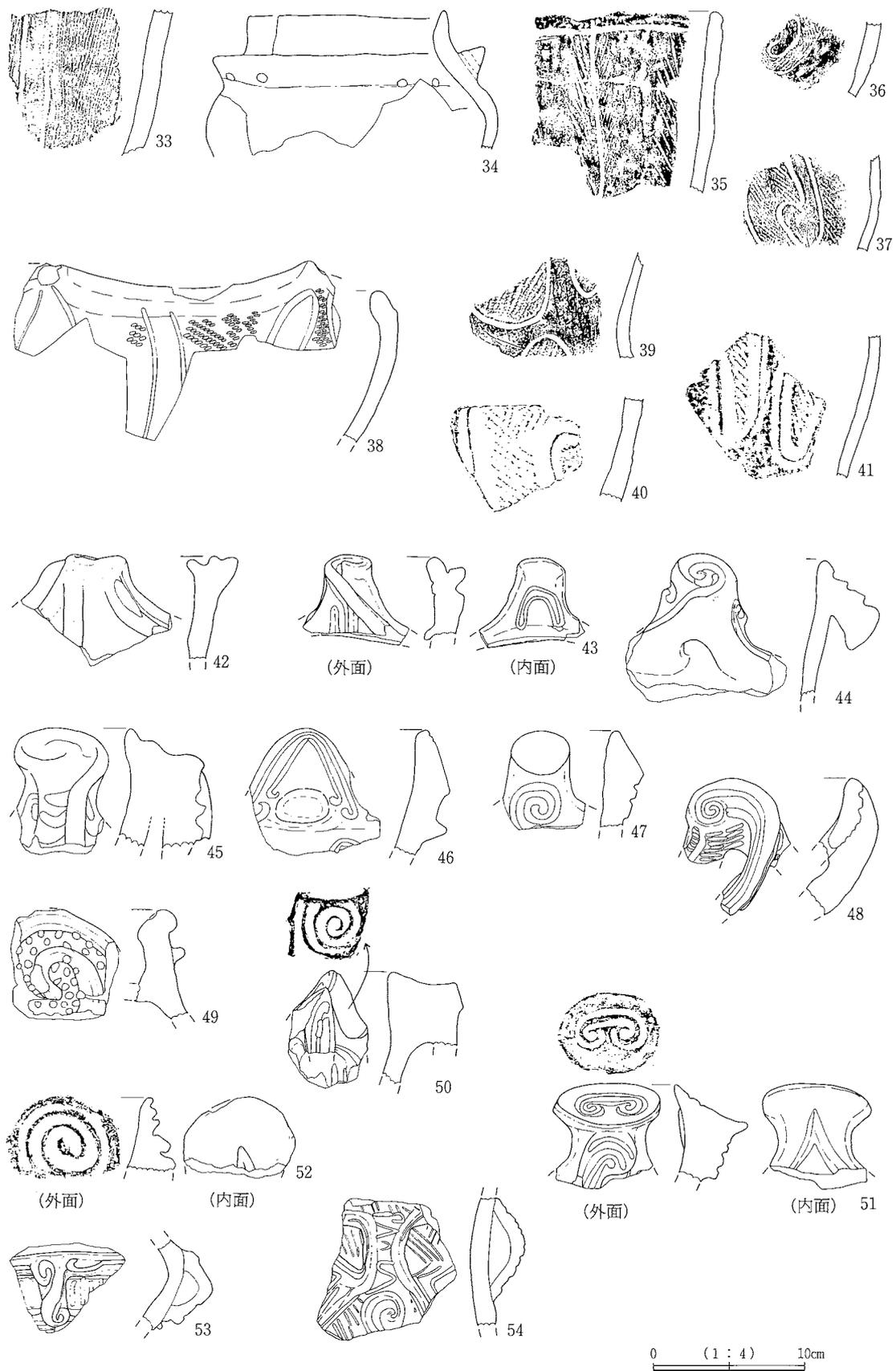


图12 出土土器 (4)

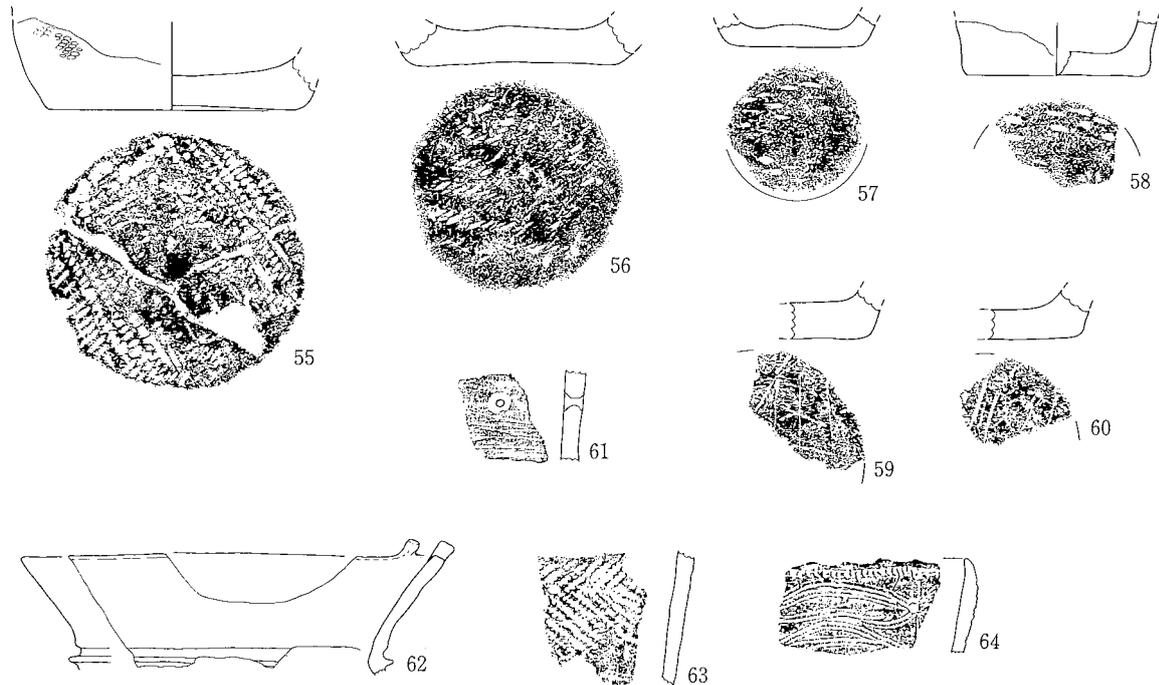


図13 出土土器 (5)

0 (1:4) 10cm

復元実測し得ない小片で、かつ無文の土器片は挿図および写真図版には示していない。しかし、僅かでも文様部がある破片を含めれば、おそらくは総数の2割程を占めると思われる。そしてこの中には、赤色塗彩（以下、赤彩という）の認められるものもあった。もちろん、無文土器片以外にも赤彩は見られるが、多くは無文土器片であった。以下、図示しなかったこれらの破片について、観察所見を記す。なお、赤彩部の判断は観察者の実見によるもので、疑わしい破片は除外した。また破片の部位の判断がつきづらく、器種が何なのか判らないものが殆どのため、器種別のデータはとっていない。

赤彩片の総数は211点である。赤彩の認められる部位別では①口縁部内外面64点、②口縁部内面のみ19点、③口縁部外面のみ32点、④体部内外面29点、⑤体部内面のみ55点、⑥体部外面のみ9点、⑦底部外面のみ3点であった。赤彩片の器形は、浅鉢と判断できるものが多く（口縁部片から）、他に有孔鏝付土器片、深鉢の波状口縁部片と思われるものが僅かに含まれる。器面調整は殆どがよくヘラミガキされており、精製されたものと言える。また、さきに挙げた部位別とは別に、赤彩範囲を示すものとして、浅鉢口縁部片が2点見られた。1点は、口縁内面から口唇部を経、外面約2cmで赤彩範囲が終了しているものである。もう1点は、真上に面取りされた口唇部と口縁外面約1.5cmまで赤彩されるもので、外面はユビナデによる横位沈線の直上で終了している。残存部位がバラバラなのが殆どのため、赤彩部位の傾向を述べるのは早計ながら、少なくとも浅鉢の口縁部には塗彩される傾向の強いことが窺われた。

表1 出土土器観察表(1)

法量は①口径②底径③器高④最大径、単位はcm、()は推定値

No.	器種	法量	色調	残存	形態・文様の特征など	出土
1	深鉢	①(38.0)	黒褐色	胴1/2周	口縁が弱く内湾するキャリパー型で口縁には隆帯の渦巻文内に縄文LR横転を充填。頸部は無文。胴部は縄文LR縦転内に垂下沈線と蕨手状沈線の渦巻文。	集 2
2	深鉢	① 15.3 ② 7.4 ③ 22.9	橙褐色	80%	口縁は2個一対の小突起と思われる。無文部はよく磨かれ、胴部には縄文RL縦転内に蛇行及び並行沈線が垂下。内面には炭化物が付着する。	集 2
3	深鉢	—	橙褐色	口縁片	口縁は隆帯による楕円区画内に縄文LR横転。頸部は無文で胴部との境は横位並行沈線とす。	集 2
4	深鉢	—	橙褐色	口縁片	渦巻文を伴う隆帯区画の楕円文内に縦位沈線を描く。胴部地文はRLらしき縄文で弧状沈線文を描く。	集 1
5	深鉢	—	淡褐色	胴部片	小型深鉢胴部。地文は縦～斜転の縄文RLで直線文と蛇行沈線が垂下。内面黒灰色。	集 1
6	深鉢	—	暗褐色	1/3周	頸部無文帯と胴部を隆帯で区画し、胴部は地文の縄文RL縦転内に隆帯のクラック文が垂下。	不明
7	深鉢	—	淡褐色	口縁片	大型深鉢。地文は撚糸文で口縁は隆帯区画による楕円文。胴部は隆帯による蛇行文が垂下。	集 1
8	深鉢	—	橙褐色	胴部片	地文は縄文LR縦転で蛇行及び直線の隆帯が垂下。磨消部はない。	不明
9	—	—	橙褐色	口縁片	浅鉢と思われる。屈曲する口縁は渦巻を伴う隆帯で区画され、内部に縦位沈線、また下位に列点状刺突を付す。体部外面は無文で内外面とも横ヘラミガキ。	22-3 G
10	—	—	暗褐色	口縁片	浅鉢と思われる。体部との境は強く屈曲し、口縁は隆帯区画内に斜位沈線が描かれる。内外面横ヘラミガキ。	19-3 G
11	甕	①(16.4)	暗褐色	1/4周	口縁は無文で外反し、口唇内面は折返し。胴部は綾杉状文で隆帯の蕨手状文を付す。頸部は蛇行沈線が巡る。胎土に金雲母を含む。	集 1
12	深鉢	—	橙褐色	口縁片	口縁は隆帯で区画され、内部は斜行沈線に直交する細い隆帯を付して籠目文となっている。胴部は一部綾杉状沈線文。	7-2 G
13	—	—	暗褐色	口縁片	刻目により細かい波状文を描出する文様帯で、下位は細かい撚糸文上に沈線を描く。	14-1 G
14	甕	①(44.0)	暗褐色	1/4周	弱い内湾口縁の下半に並行沈線の波状文と渦巻文。頸部は3本1単位の隆帯を付して胴部と区画する。	集 1
15	甕	—	暗褐色	1/4周	14と同一個体。途中で蕨手をあしらった隆帯が頸部より垂下して縦区画をなし、内部は縦横の沈線を配してパッチワーク状となっている。下位には縄文LR縦～斜転を付す。	集 1
16	深鉢	—	淡褐色	1/3周	RLと思われる密な縄文の胴部は並行沈線により磨消帯を描出。口縁との境は微隆起線。	22-3 G
17	深鉢	② 7.8	淡褐色	全周	16と同一個体。磨消部のあり方はさほど規則性をもたない。	22-4 G
18	深鉢	—	橙褐色	口縁片	口縁は隆帯の渦巻文で区画内は複節縄文LR横転。胴部も地文は同様で垂下する並行沈線間を磨り消す。	16-3 G
19	深鉢	—	淡褐色	口縁片	地文は縄文RL縦～斜転で隆帯で口縁を区画し、渦巻部より隆帯を垂下させる。内面には炭化物が厚く付着。	21-4 G
20	—	—	橙褐色	口縁片	口縁は隆帯による楕円区画内に縄文LR横及び縦転。内面に炭化物付着。	集 1

表2 出土土器観察表(2)

法量は①口径②底径③器高④最大径、単位はcm、()は推定値

No.	器種	法量	色調	残存	形態・文様の特徵など	出土
21	深鉢	—	暗褐色	胴部片	縄文RL縦転が地文。縄文内に波状沈線が垂下し、磨消帯をもつ。	22-4 G
22	深鉢	—	橙褐色	胴部片	地文は復節縄文LRL前々段反燃で縦転。太い3条の並行沈線が垂下する。	9-1 G
23	深鉢	—	暗褐色	胴部片	地文は撚糸文で連弧文と見られる沈線文が描かれる。	24 G
24	深鉢	② 8.2	橙褐色	底1/2 周他	地文は縦沈線で垂下沈線により区画して磨消部を交互に描出する。	22-4 G
25	深鉢	①(22.5)	黄褐色	1/3周	内湾する口縁は幅広の沈線で楕円文が描かれ、内部には縄文LR横転を充填。胴部は縄文LR縦転を地文とし、並行沈線を垂下して内部を磨り消す。	22-4 G
26	深鉢	② 5.6	橙褐色	底部1 周他	縄文LRの地文に縦沈線を密に描き磨消部を描出する。	2-2 G
27	深鉢	—	淡褐色	口縁片	深いナデによる隆起文が円文となり、内部は無節縄文LR横転及び磨り消し。	2 T
28	深鉢	④(33.0)	淡褐色	胴部片	地文なし。微隆起線による渦巻文。	2-2 G
29	深鉢	—	暗褐色	胴部片	磨消帯と縦位沈線の施文帯。	14-1 G
30	—	—	暗褐色	胴部片	条線で渦巻文を描く。	22-4 G
31	深鉢	—	橙褐色	胴部片	磨消帯と小さな弧状条線からなる施文帯。	1 T
32	深鉢	—	暗褐色	胴部片	条線によるレンズ状文で磨消部をもつ。	22-3 G
33	深鉢	—	暗褐色	胴部片	縦条線を地文とし、並行沈線内を磨り消す。	14-1 G
34	有孔鍔 付土器	①(13.0) ④(19.4)	暗灰褐色	半周弱	断面三角形の厚い鍔部に1単位2個の縦貫孔が5単位巡ると思われる。内外面共密な横ヘラミガキ。	14-1 G
35	深鉢	—	暗褐色	口~胴 部片	雑なつくりの小型深鉢。口縁部文様帯はなく、横位沈線より垂下する沈線両側に綾杉状文を付している。口縁欠損部は小突起部らしい。	9-1 G 9-3 G
36	深鉢	—	灰褐色	胴部片	沈線による「J」状文で内部は無節縄文Lr。称名寺式と思われる。	20-1 G
37	深鉢	—	暗褐色	胴部片	沈線による「J」状文で内部は無節縄文Lr。称名寺式と思われる。	6-1 G
38	深鉢	—	暗褐色	口縁片	4単位の小さな波状口縁と思われる。地文は粗い縄文LR縦転で沈線による磨消帯が波状部では「ハ」となる。	18-1 G
39	深鉢	—	淡褐色	胴部片	胴括れ部片で「n」と「U」状沈線による二帯構成。縄文はRL縦転で区画外は磨り消し。	7-4 G
40	深鉢	—	灰褐色	胴部片	断面三角形の微隆起による曲線区画。縄文はLR縦転。	20-3 G
41	深鉢	—	暗灰褐色	胴部片	断面三角形の微隆起による「U」状区画。内部の縄文はLR縦転。	2-2 G
42	—	—	淡褐色	—	波状口縁の頂部が渦巻となっており、外面は断面三角形の隆帯が付される。	22-1 G
43	—	—	暗褐色	—	下位から連続して頂部で渦巻となる。内面は沈線による意匠。	22-4 G
44	—	—	暗褐色	—	下部及び両側面が貫通している。頂部は渦巻文。	不明
45	—	—	淡褐色	—	全体に渦巻をモチーフとした太い突起部。	24 G
46	—	—	淡褐色	—	波状口縁片と思われ、外面は沈線による藤手状文で縁取る。	16-3 G

表3 出土土器観察表(3)

法量は①口径②底径③器高④最大径、単位はcm、()は推定値

No.	器種	法量	色調	残存	形態・文様の特徴など	出土
47	—	—	暗褐色	—	外傾に面取りされた頂部。下位に太い沈線で渦巻文を描く。	14-2 G
48	—	—	淡褐色	—	渦巻を基調とし、半載竹管状工具による刺突をあしらう。	24 G
49	—	—	淡褐色	—	隆帯による太い渦巻の内部全面に深い刺突を施す。	23-2 G
50	—	—	暗褐色	—	側面両側は沈線の渦巻文。手前は輪状把手と思われる。胎土に金雲母を含む。	22-1 G
51	—	—	暗褐色	—	沈線による渦巻をモチーフとする。内面は隆帯。	16-4 G
52	—	—	暗褐色	—	太い沈線の渦巻文。胎土に金雲母を含む。	9-4 G
53	—	—	暗褐色	—	逆S字状文の橋状把手を付した口縁部。隆帯区画内は縦位沈線。	1 T
54	—	—	橙褐色	—	橋状把手の下は隆帯の渦巻文。全体に斜行沈線がベースとなる。	集 1
55	—	② 13.8	橙褐色	底部片	網代圧痕と思われるが編み方は不明。	集 2
56	—	② 11.0	淡褐色	底部片	網代圧痕は綾編みと思われるが詳細は不明。	集 1
57	—	② 7.4	淡褐色	底部片	網代圧痕があるが、編み方はいまひとつ不明。	8-1 G
58	—	② (9.6)	淡褐色	底部片	僅かに網代圧痕が見えるが詳細不明。	15-2 G
59	—	—	橙褐色	底部片	木葉痕が見られる。	19-4 G
60	—	—	橙褐色	底部片	木葉痕が見られる。	8-2 G
61	—	—	黒褐色	胴部片	無文で内外面共横ヘラミガキで滑らか。焼成後に径4ミリの穿孔があり、補修孔と思われる。	集 2
62	深鉢	①(22.6)	黒褐色	1/3周	薄手の口縁が大きく外傾し、一部に小さなつまみ状の突起がつく。内外面共に横ヘラミガキが施され、頸部には稜の鋭い隆帯が巡る。胎土は含繊維。	13-3 G
63	深鉢	—	淡褐色	胴部片	全面に羽状織文を付す。断面は黒灰色で繊維を含む。黒浜式と思われる。	19-2 G
64	—	—	橙褐色	口縁片	弱く内湾する細かい波状口縁。上部に連続爪形文(C字)を施し、下位には肋骨文。諸磯a式。	9-1 G



整理済遺物(一部)

第4節 石 器

図示したものは打製石斧32点、磨製石斧1点、自然の円礫による凹石類13点、石鏃3点(うち1点は石匙?)の計49点である。以下、これらについて見てゆく。

①打製石斧(図14~17)

打製石斧と判断できるもの(破片含む)76点のうち32点を図示した。分類にあたっては、従前より形状により撥形、分銅形、短冊形の3つが示されており、観察表はこれに拠った。すなわち以下のとおり。

「撥形」刃部幅が基部幅の1.5倍以上あり、全長は最大幅の2倍未満。最大幅は刃部にある。

「分銅形」中央の両側縁に大きな抉りがあり、この上下両側がほぼ均等に調整加工されたもの。上下両端を刃部とする。

「短冊形」上記に含まれないもの。全長は最大幅の2倍以上も以下もある。刃部幅は基部幅の1.5倍未満であり、最大幅はどこでもよい。(鈴木次郎「打製石斧」~『縄文文化の研究・7』雄山閣 1987)

本遺跡では短冊形が30点と殆どを占めており、図示しなかったものの多くも短冊形と思われる。残り2点(1、8)が撥形とされるもので、8は刃部欠損のため短冊形の可能性もある。

上記とは別の観点で形状を見た場合、幾つかの特徴的なものがあり、以下に列挙する。

長軸の断面形が弧状であるもの。7、13、21、23、28などであるが、これに類するものは他にもある。弧の内側が柄の向きにくる片手鏃が想像し得る。

平面形が細身で断面が楕円状に厚いもの。14、19、23などであり、8、13、31もこれに近い。これらはまた、基部が特に細く丸くなっている傾向がある。

比較的小型品で薄手のもの。11、15、24であり、いずれもシャープさをもつ。

大型で厚手のもの。26と32で、ともに欠損品である。強い打撃力をもつ石斧であろう。

その他として、刃部の形状に違いが見られる。直刃と言えるのは1、5、10、17、18、25、28などがあり、丸刃(曲刃)は4、6、7、9、11、20、22、23、24などとなろう。また、長軸に対して刃部が著しく傾く(斜めである)ものとして7、16、20、22、28がある。

②磨製石斧(図17)

33の1点のみである。残存する側を刃部としたが、刃先は使用のためか細かな凹凸が多くシャープさに欠ける。打製石斧の26、32と同様の強い打撃を生じさせ得る道具である。

③石鏃(図17)

34~36の3点としたが、34は他2点と比べて大きく、また抉り部の状況(鏃だとすれば有茎か抉りなし)、材質の違いなどから別品(例えば石匙の一部)と考えたほうがよいかもしれない。35と36はいずれも黒曜石製の無茎鏃で、35は正三角形に近く抉れの浅いもの、36は細身の二等辺三角形を呈する。

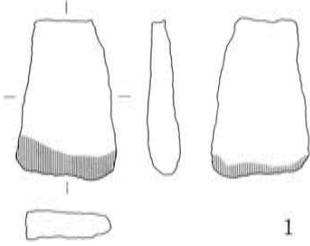
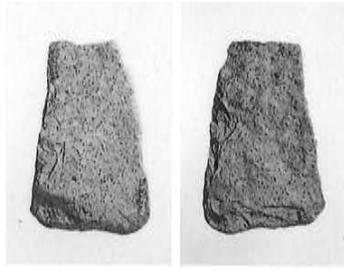
④凹石・敲石・磨石(図18、19)

自然円礫の基本形状を残し、部分的に使用痕が認められるものを一括した。これらの石器はその名称、用途については明確になっていないところが多いため、ここでは便宜上以下の観点から遺物を呼称しておく。

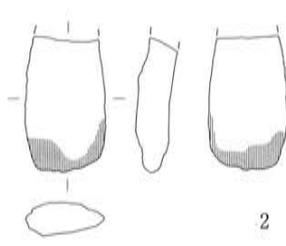
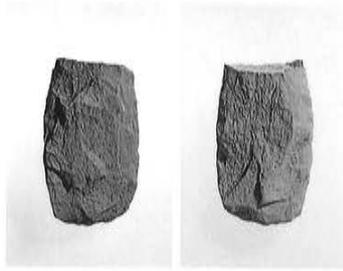
凹石は、親指大の円形で断面が三角形もしくは弧状を呈す凹み部をもつもので、片面に1~2箇所の凹みが片面及び両面に見られる。凹み部は平・断面形とも比較的整っている。

敲石は、細かい凹凸がアバタ状に集合した部位の見られるもので、その部分での整った範囲及び凹みはない。ただ、側縁が細かく欠損した結果、横から見ると弧状に凹んでいるものがある。

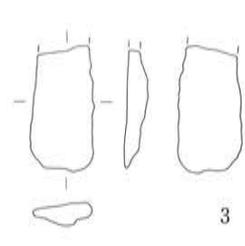
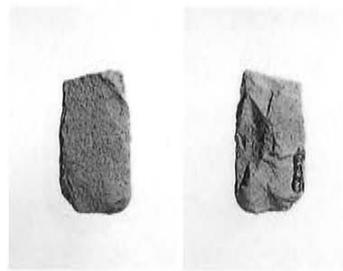
磨石は、自然面とは異なった滑らかな面が一定の範囲に見られるものであり、凹みにはならない。



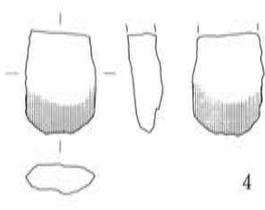
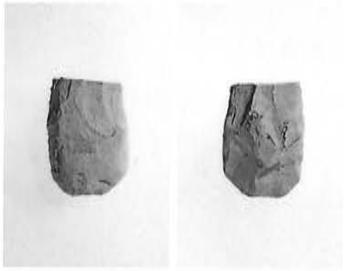
1



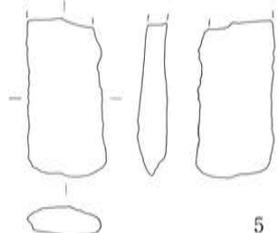
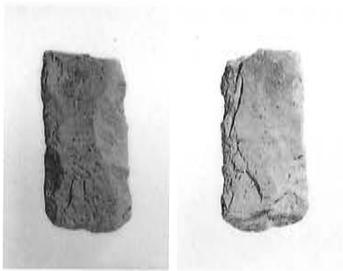
2



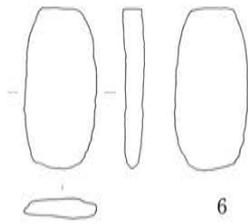
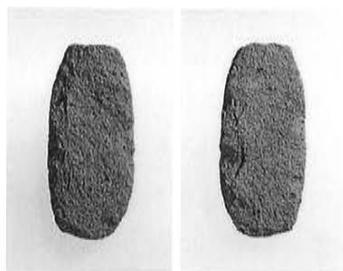
3



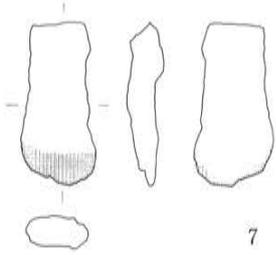
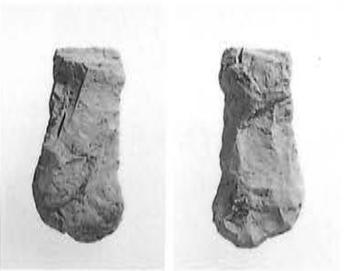
4



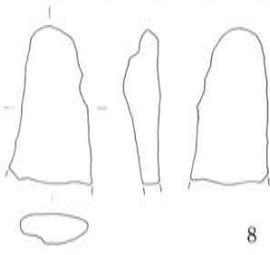
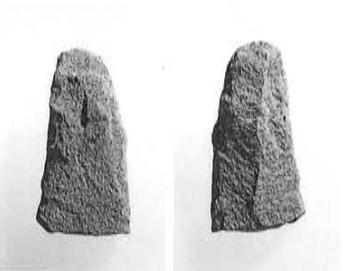
5



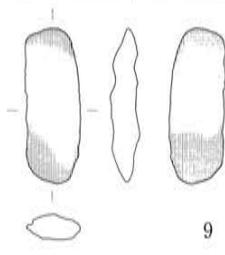
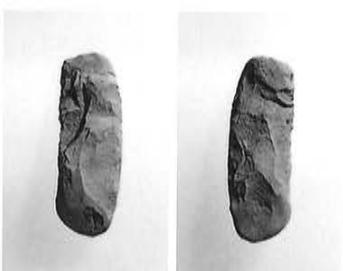
6



7



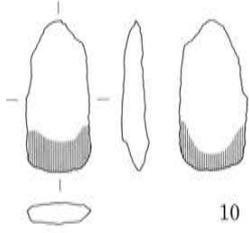
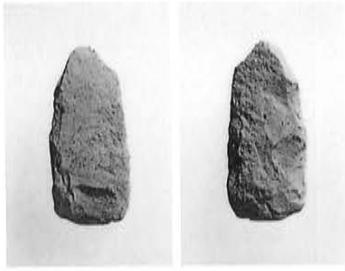
8



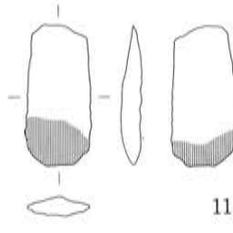
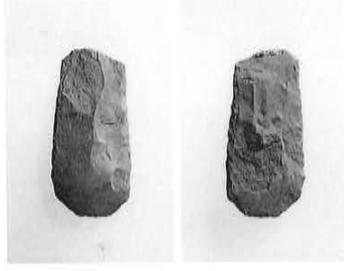
9

0 (图 1 : 5) 10cm

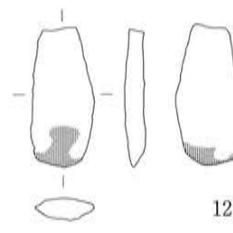
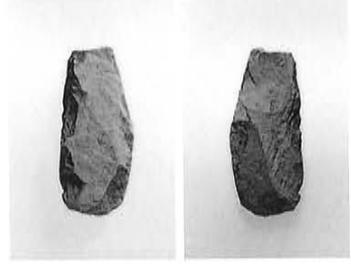
图14 出土石器 (1)



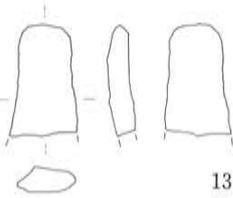
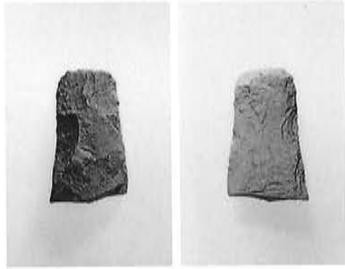
10



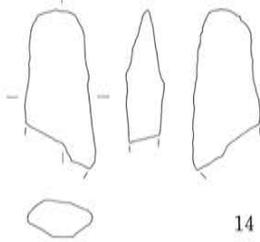
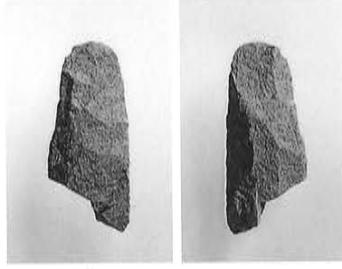
11



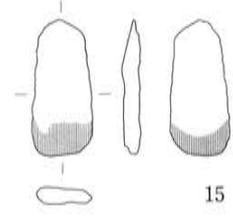
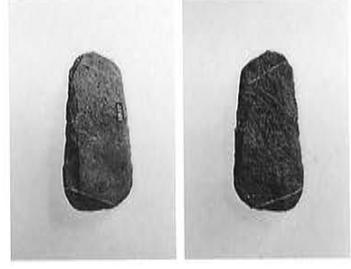
12



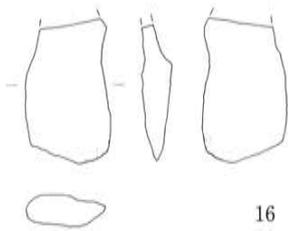
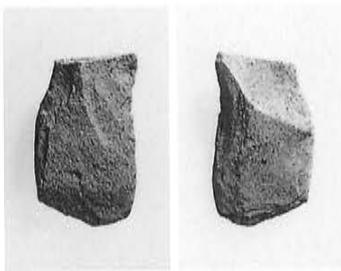
13



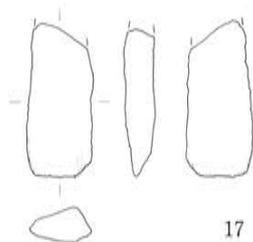
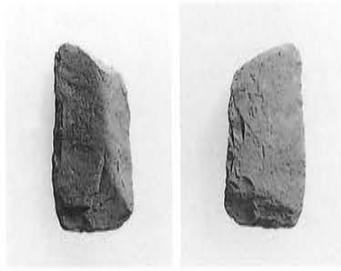
14



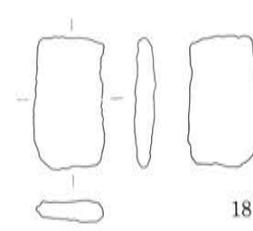
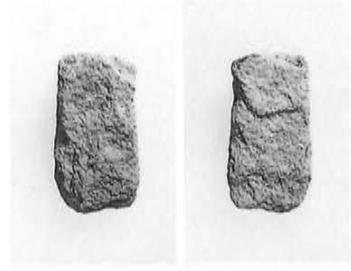
15



16



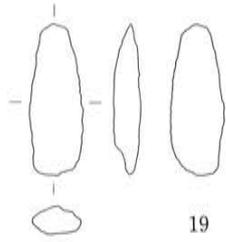
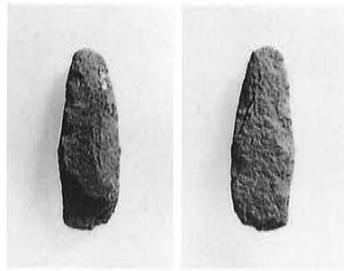
17



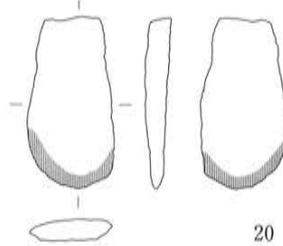
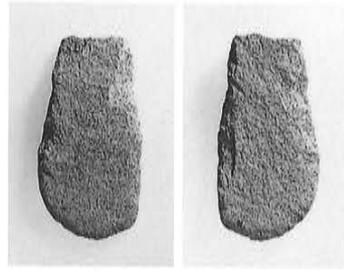
18

0 (图 1 : 5) 10cm

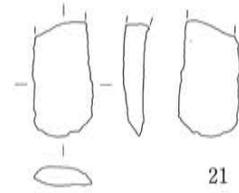
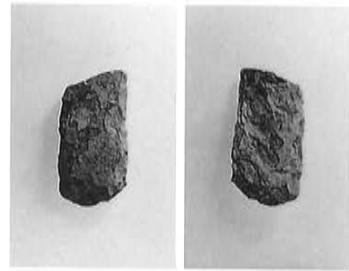
图15 出土石器 (2)



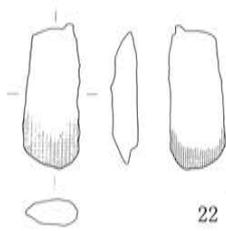
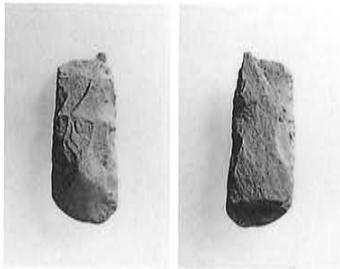
19



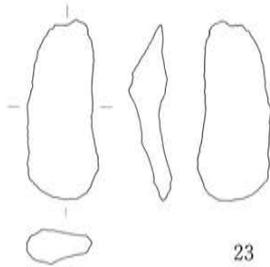
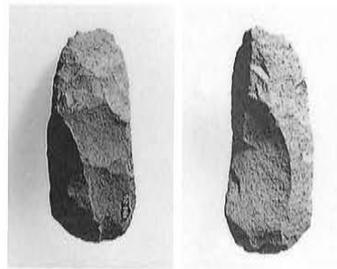
20



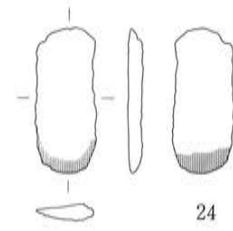
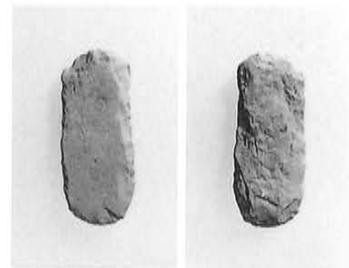
21



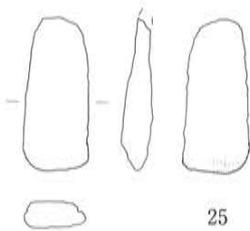
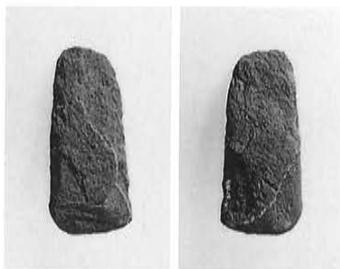
22



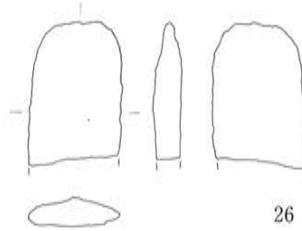
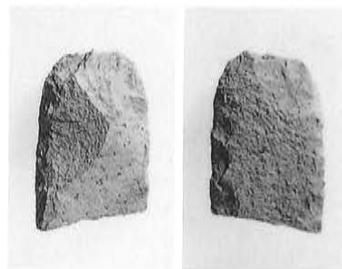
23



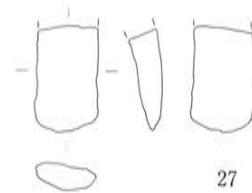
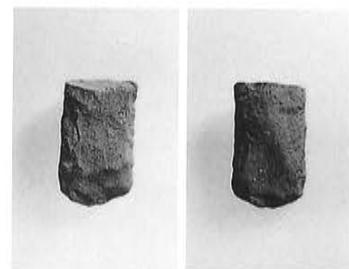
24



25



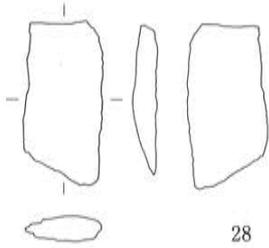
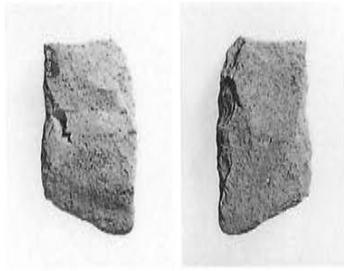
26



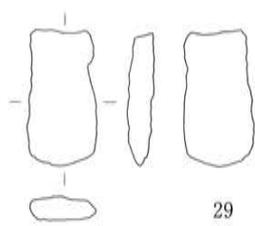
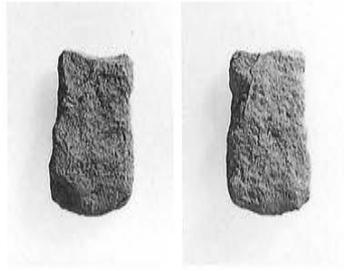
27

0 (图 1 : 5) 10cm

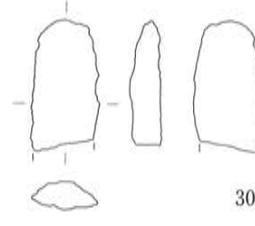
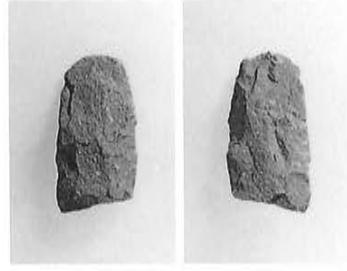
图16 出土石器 (3)



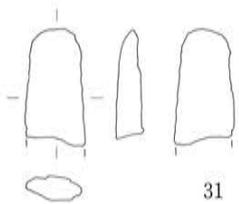
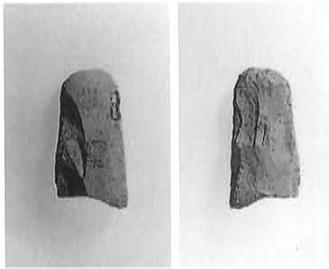
28



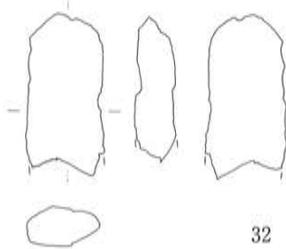
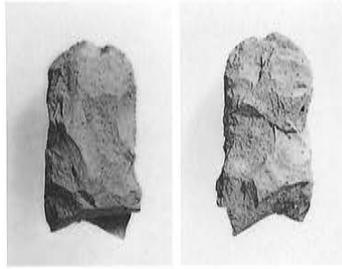
29



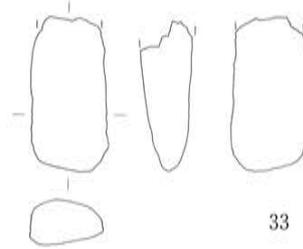
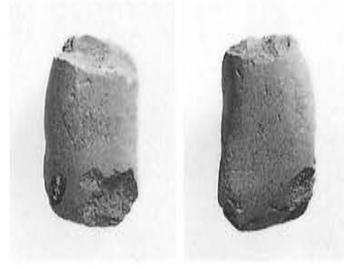
30



31

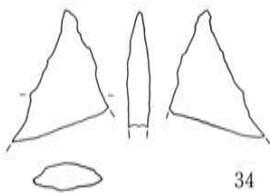
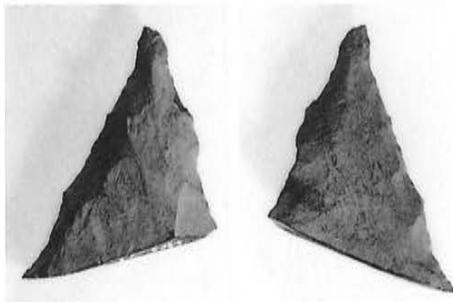


32

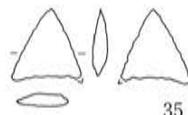


33

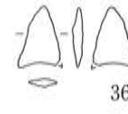
0 (图 1 : 5) 10cm



34



35



36

0 (图 1 : 2) 5 cm

图17 出土石器 (4)

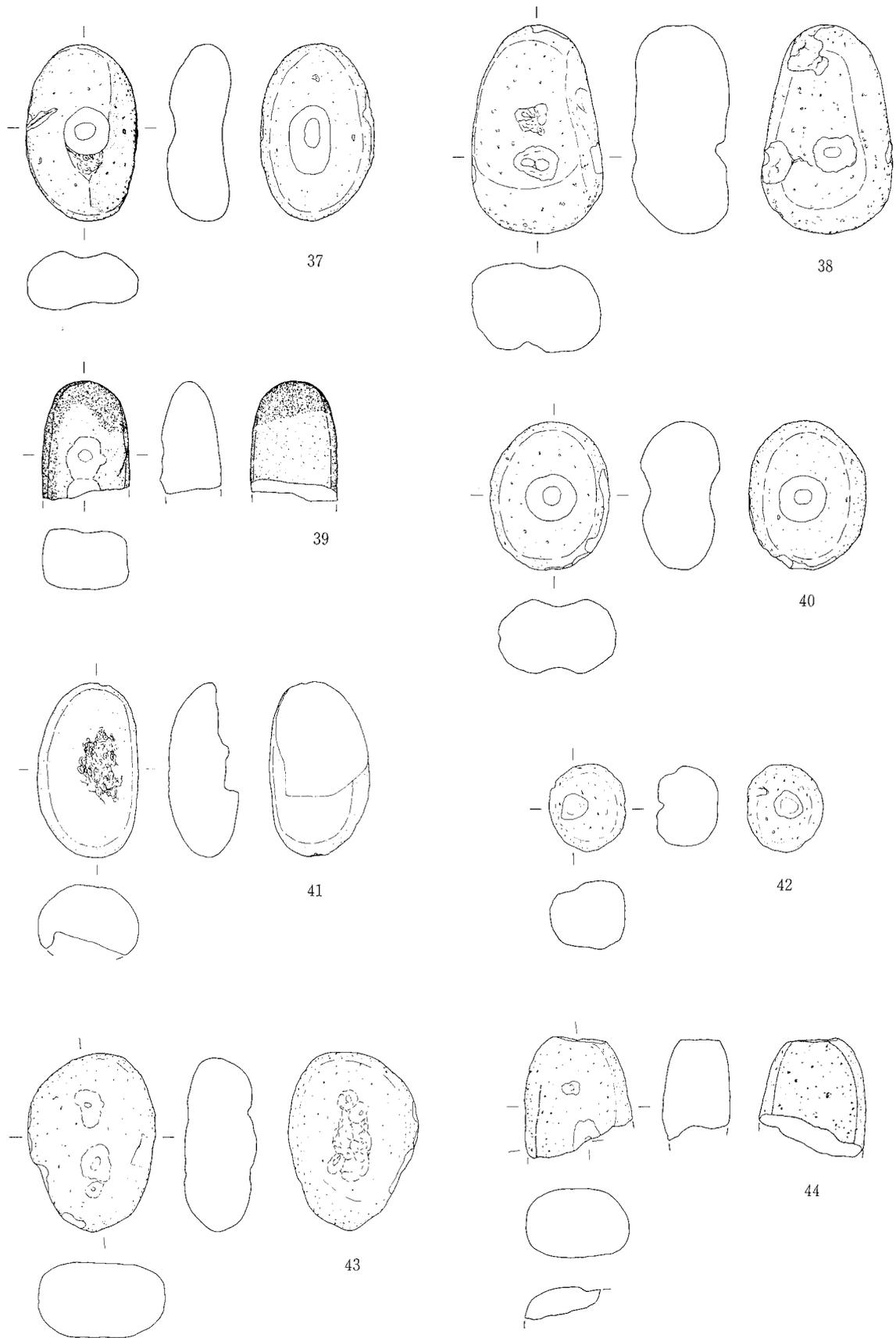


图18 出土石器 (5)

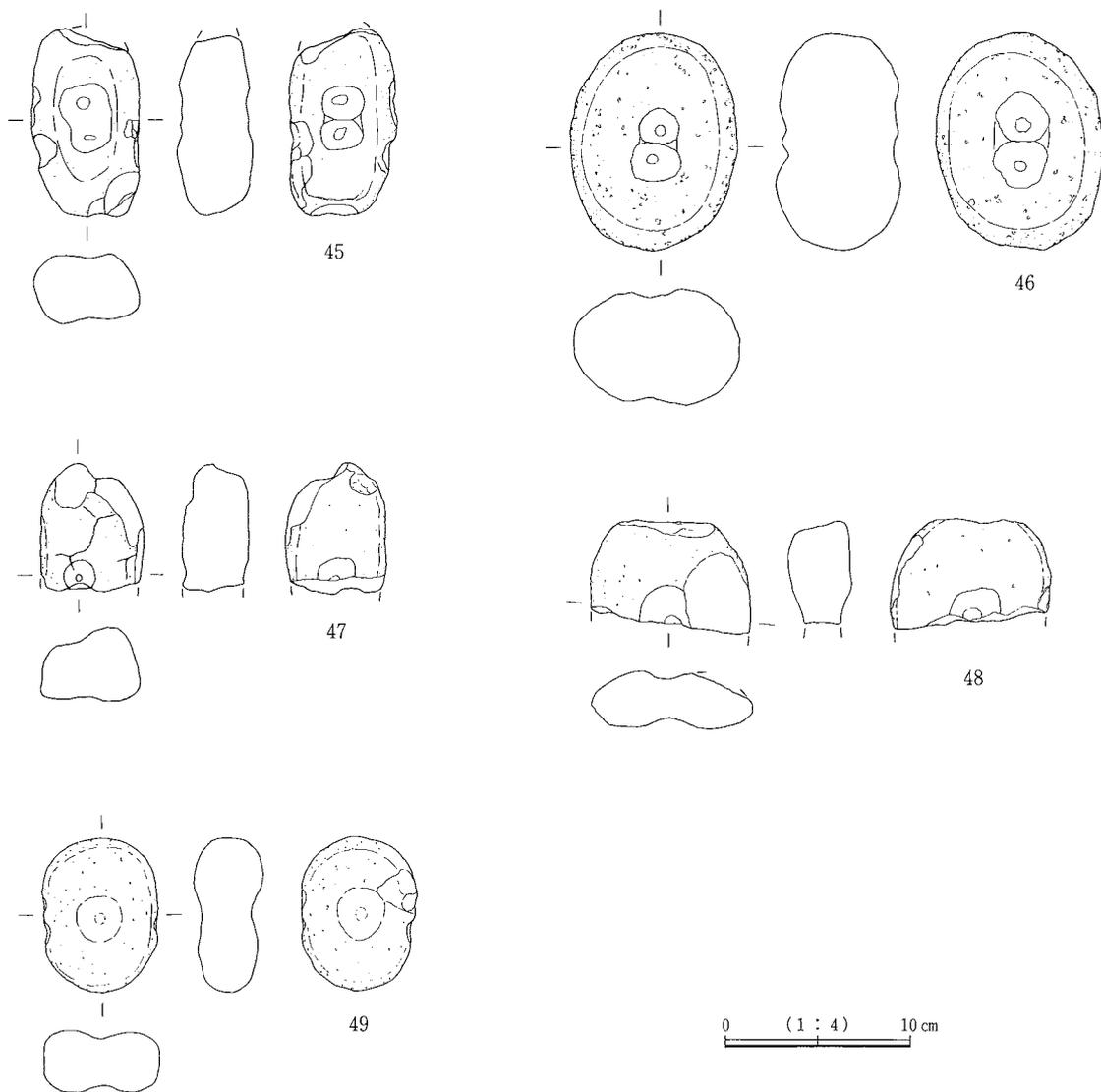


図19 出土石器（6）

以上により13点の石器を分類してみた。凹石としたものは37、40、42、45、46、48、49の7点で、うち37と48では敲石の状況も見られた。また37の一部には摩滅した範囲もあり、磨石でもあるというべきかもしれない。42は球状で凹みも明確でないが一応凹石とした。敲石は37～39、41、43、44、47、48の8点で37と48は先述のとおり凹石と重複する。また39と44は磨石でもある。磨石は39と44の2点。39は全面が平滑に摩耗し断面が隅丸長方形になっている。44では敲打部と思われる中央の剝離状凹みがない方の面の摩耗が著しく、非常に滑らかで、自然面である側縁との境に弱い稜が認められた。

これらの他に、非常に整った球状の石が2点（径1cm、4.5cm）、断面が正方形（一辺4～4.5cm）の角柱状の石片1点、断面楕円形（長径2.3cm）で長さ12cmの乳棒状の細長い石なども出土したが、石器とは言い難いので提示はしなかった。

表4 出土石器観察表(1)

単位はcm・g、()は残存値

No.	器種	①全長 ③厚み	②幅 ④重量	色調	石質	残存	出土	観察の所見など
1	打製石斧	① 10.6 ③ 2.1	② 6.6 ④ 185	茶灰色	輝石安山岩	完形	集 1	撥形。側縁は平坦で、直刃部は使用によりよく摩耗する。
2	打製石斧	①(9.0) ③ 2.3	② 5.3 ④(130)	灰色	砂岩	基部欠	集 1	短冊形。中央が厚手。刃部に使用痕あり。
3	打製石斧	① 8.4 ③ 1.5	② 4.1 ④ 60	灰色	砂質頁岩	完形	集 1	短冊形。全体に摩耗している。
4	打製石斧	①(6.8) ③ 2.0	② 4.6 ④(80)	灰色	硬砂岩	基部欠	集 2	短冊形と思われる。丸刃部がよく摩耗する。
5	打製石斧	① 10.5 ③ 1.9	② 5.1 ④ 160	茶灰色	砂岩	完形	表 採	短冊形。片面に自然面を残す。側縁及び刃部は調整細かい。
6	打製石斧	① 10.7 ③ 1.3	② 4.7 ④ 110	茶灰色	両輝石安山岩	完形	13-2 G	短冊形。弧状の刃部を呈す。調整は雑。
7	打製石斧	① 10.8 ③ 2.1	② 4.9 ④ 135	白灰色	砂岩	完形	20-2 G	短冊形。僅かに中央が抉れ、刃部は弧状、断面も弧状を呈す。
8	打製石斧	①(10.4) ③ 2.4	② 5.4 ④(140)	灰色	輝石安山岩	刃部欠	19-4 G	撥形。全体に摩耗が進んでいる。
9	打製石斧	① 10.3 ③ 1.8	② 3.5 ④ 80	茶灰色	砂岩	完形	27-1 G	短冊形。断面は弧状を呈す。両端とも使用によりよく摩耗する。
10	打製石斧	① 10.0 ③ 1.7	② 4.3 ④ 90	灰色	砂質頁岩	完形	15-1 G	短冊形。断面やや弧状。側縁に比べ刃部は使用のため摩耗する。
11	打製石斧	① 9.3 ③ 1.3	② 4.3 ④ 60	茶灰色	硬砂岩	完形	17-2 G	短冊形。非常に薄い。片面に自然面を残し、刃部は使用のため摩耗する。
12	打製石斧	① 9.2 ③ 1.5	② 4.1 ④ 65	黄灰色	砂岩	完形	22-1 G	短冊形。刃部のみ摩耗が認められる。
13	打製石斧	①(7.4) ③ 1.7	② 4.4 ④(65)	灰色	輝石安山岩	刃部欠	7-3 G	短冊形と思われる。断面は弧状を呈す。側縁は細かく調整する。
14	打製石斧	①(10.5) ③ 2.4	② 4.3 ④(130)	灰色	輝石安山岩	刃部欠	24 G	短冊形。中央が厚手で刃部側は少々幅広。
15	打製石斧	① 9.0 ③ 1.1	② 4.0 ④ 65	暗緑灰色	緑泥片岩	完形	3 T	短冊形。薄手の小型品。刃部及び刃部に近い側縁は摩耗する。
16	打製石斧	①(9.6) ③ 2.0	② 5.6 ④(130)	茶灰色	両輝石安山岩	基部欠	14-1 G	短冊形と思われる。中央は少々抉れる。
17	打製石斧	①(10.2) ③ 2.3	② 4.3 ④(120)	暗茶灰色	砂質頁岩	基部欠	15-3 G	短冊形。片面の大半は自然面。厚手で整った形状である。
18	打製石斧	① 8.8 ③ 1.4	② 4.6 ④ 85	茶灰色	砂質頁岩	完形	15-4 G	短冊形。全体に摩耗する。
19	打製石斧	① 10.0 ③ 1.8	② 3.5 ④ 65	茶灰色	輝石安山岩	完形	25-1 G	短冊形。少々中央が膨らみ、乳棒状磨製石斧に近い形状。片面に自然面を残す。

表5 出土石器観察表(2)

単位はcm・g、()は残存値

No.	器種	①全長 ③厚み	②幅 ④重量	色調	石質	残存	出土	観察の所見など
20	打製石斧	① 11.3 ③ 1.6	② 5.6 ④ 140	茶灰色	輝石安山岩	完形	19-3 G	短冊形。全体に摩耗する。扁平で非対照な丸刃。
21	打製石斧	①(7.6) ③ 1.6	② 3.9 ④(60)	茶灰色	砂岩	基部欠	19-4 G	短冊形。基部側に厚みをもつ。刃部はさほど摩耗していない。
22	打製石斧	① 9.6 ③ 1.8	② 3.7 ④ 80	白灰色	砂岩	完形	24G	短冊形。断面弧状の小型品。刃部はよく摩耗する。
23	打製石斧	① 11.8 ③ 2.4	② 4.6 ④ 145	灰色	両輝石安山岩	完形	24G	短冊形。断面が強い弧状を呈す。丸刃。
24	打製石斧	① 9.6 ③ 0.9	② 4.1 ④ 60	茶灰色	砂岩	完形	22-4 G	短冊形。非常に薄い。よく摩耗する側を刃部と考えておく。片面に自然面を残す。
25	打製石斧	① 10.1 ③ 1.9	② 4.3 ④ 120	暗灰色	両輝石安山岩	完形	19-4 G	短冊形。刃部は使用によりよく摩耗する。直刃。
26	打製石斧	①(9.5) ③ 2.0	② 6.0 ④(160)	灰色	輝石安山岩	刃部欠	14-1 G	短冊形。片面に自然面を残す。大型品。
27	打製石斧	①(7.1) ③ 2.0	② 4.2 ④(80)	灰色	輝石安山岩	基部欠	24G	短冊形。全体によく摩耗する。
28	打製石斧	①(10.9) ③ 1.7	② 5.1 ④(130)	灰色	砂質頁岩	基部欠	13-2 G	短冊形。断面少々弧状。刃部は直刃で著しく斜傾する。
29	打製石斧	① 9.0 ③ 1.6	② 4.6 ④ 115	茶灰色	両輝石安山岩	完形	14-2 G	短冊形。全体に摩耗している。
30	打製石斧	①(8.7) ③ 2.0	② 4.4 ④(95)	茶灰色	輝石安山岩	刃部欠	15-4 G	短冊形。中央が厚手。基部～側縁は端部が鋭い。
31	打製石斧	①(7.7) ③ 1.6	② 3.8 ④(60)	灰色	砂質頁岩	刃部欠	24G	短冊形。片面に自然面を残す。
32	打製石斧	①(10.8) ③ 2.6	② 5.2 ④(185)	灰色	輝石安山岩	刃部欠	1 T	短冊形。厚手の大型品。側縁片方が少々抉れる。
33	磨製石斧	①(10.2) ③ 3.5	② 5.1 ④(285)	緑灰色	緑泥片岩	基部欠	15-4 G	乳棒状。刃部は使用のためか、先端が細かく欠損している。
34	石鏃?	①(3.4) ③ 0.6	②(2.0) ④(5.00)	黄灰色	砂岩?	基部欠	集 1	先端がよく尖る。
35	石鏃	① 2.0 ③ 0.3	②(1.8) ④(0.95)	黒透色	黒曜石	一部欠	13-2 G	無茎。ほぼ完形。基部の扱いは弱い。
36	石鏃	① 1.7 ③ 0.2	②(1.0) ④(0.30)	黒透色	黒曜石	一部欠	19-3 G	無茎。細長い二等辺三角形。基部の扱いは弱い。
37	凹/敲石	① 11.9 ③ 3.9	② 7.4 ④ 500	淡茶灰色	両輝石安山岩	完形	集 1	片面は浅い皿状で敲打により摩滅。両側面にも敲打痕。一部は磨られて滑らか。
38	敲石	① 14.3 ③ 5.7	② 8.8 ④ 1095	灰色	両輝石安山岩	完形	集 1	両面及び側面一部に敲打痕。

表6 出土石器観察表(3)

単位はcm・g、()は残存値

No	器種	①全長 ③厚み	②幅 ④重量	色調	石質	残存	出土	観察の所見など
39	敲/磨石	①(7.5) ③ 3.8	② 5.9 ④(300)	淡褐色	砂岩	半分欠	集 1	片面中央に敲打痕らしき凹みあり。全体に磨られており、部分的に煤が付着。
40	凹石	① 10.0 ③ 4.9	② 8.0 ④ 475	淡茶灰色	両輝石安山岩	完形	3 T	両面共に同上、同大の凹み。
41	敲石	①(11.9) ③(4.7)	② 6.8 ④(485)	暗灰色	硬砂岩	一部欠	26-1 G	残存する片面中央に敲打痕集中。
42	凹石	① 6.0 ③ 4.5	② 4.9 ④ 135	灰色	両輝石安山岩	完形	22-3 G	両面が僅かに凹む球状の石。
43	敲石	① 12.1 ③ 5.1	② 8.7 ④ 660	灰色	両輝石安山岩	完形	6 T	両面及び側面一部に敲打痕。
44	敲/磨石	①(7.5) ③ 4.7	② 7.2 ④(375)	暗灰色	両輝石安山岩	半分欠	24 G	上端と片面中央に敲打痕。もう片面は全体によく磨られて滑らか。
45	凹石	①(10.0) ③ 3.6	② 5.7 ④(335)	茶灰色	砂岩	一部欠	16-3 G	側面に敲打による欠損状凹み。表裏両面中央は平面瓢箪状の凹み。
46	凹石	① 11.6 ③ 6.0	② 9.0 ④ 780	淡赤灰色	両輝石安山岩	完形	20-1 G	両面中央に2ヶ所ずつ瓢箪状の凹みあり。片面は浅く敲打痕か。
47	敲石	①(7.0) ③ 3.9	② 5.4 ④(215)	淡赤灰色	両輝石安山岩	半分欠	14-2 G	両面中央は敲打痕らしき浅い凹み。側面の劣化著しい。
48	凹/敲石	①(6.0) ③(3.0)	② 8.6 ④(185)	淡茶色	両輝石安山岩	半分欠	26-1 G	両面中央に整った凹み。上端は摩滅した凹凸より敲打部と思われる。
49	凹石	① 8.4 ③ 3.7	② 6.2 ④ 230	白灰色	両輝石安山岩	完形	1 T	両面中央に整った凹み。左右両側面は敲打痕らしい凹み。



敲石(38)

第5章 ま と め

第1節 細野原と西大久保遺跡

土塩西大久保遺跡が立地する「細野原丘陵」は、幅4～500mの台地が5.5kmにわたって緩やかに続く、まさに「細い野の原」である。西より上増田、土塩、下増田、国衙の各地域となるが、丘陵先端部に近い国衙地区が主な居住域である以外は、台地上は耕地がその大半を占める。本遺跡はこの西寄りであり、台地と言える平坦部も比較的多く、人間が生活を展開するには適する場所であったことが想像できる。

周辺の縄文時代の遺跡、遺物の状況は第2章の第2節に記したとおりであり、これ以外にも地域の郷土史研究者によって確認されているものもある。全体的には遺跡が多く見られる地域であり、開発が進めばさらに分布域は広がるものと思われる。

さて、本遺跡の主体をなす縄文時代中期後半であるが、遺跡より西方500m付近の長久保地区、西接する下原遺跡、そして遺跡より東方1.5kmのエリアで該期の遺物が散見されており、特に下原遺跡では発掘調査によって住居跡や立石を伴う集石部の存在が明らかになっている（図1、西大久保遺跡北にある三角点の左側回り）。同じ時期の遺物包含層が全体に広がる状況からみて、本遺跡は下原遺跡と同一のものであろう。居住域は下原側、あるいはさらに北側の町道が縦貫する台地上部にその中心をとるものと考えられ、西大久保遺跡の回りはそれからははずれた周辺エリアの一部となる。これは一つの推測ではあるが、近接地の調査がなされることで遺跡の範囲や構成エリアの状況がより明確になることであろう。また、もう少し輪を広げた周辺での遺跡の在り方（近辺での土地利用状況）とその中で本遺跡（下原遺跡を含む）の位置付けについても、調査例の増加を待って検討すべき課題である。

第2節 土器について

土器はその殆どが縄文時代中期後半に比定される加曾利E式にあたるものであり、初頭のI型式から終末のIV型式まで存在していた。本遺跡周辺に限らず、加曾利E式土器の出土は町内各所にみられており、この時期の遺跡数の多さを物語っている。

このような中で、本遺跡では「曾利式」と見られるものが出土している（第4章第3節）。曾利式土器は中部地方の該期の土器としてよく知られており、調査例の増加で山梨県の北部が分布域の中心らしいことが分かってきている。以下に挙げる本遺跡の遺物群は、基本的には加曾利E式でありつつもこういった他地方の要素をも含んでいるようである。

図9-11、図10-14、15（同一個体）が曾利式と見られるものである。11は小型甕で無文口縁部の口唇は内面に折り返している。胴部は綾杉状沈線と蕨手状隆帯による意匠。14、15は大型の甕で口縁部はキャリパー状に内湾する。文様は口縁下半に渦巻を含む波状文を描く。胴部は蕨手状の隆帯による縦区画内に縦横の沈線を充填しており、下位の地文は縄文となっている。両者とも地文が基本的に沈線であることや蕨手状の隆帯の懸垂文などが見られ、曾利式の比較的古い段階の要素と言えよう。また、図9-1の大型深鉢には胴部に沈線の大型渦巻文が描かれており、これなどは「唐草文系土器」の要素とも見られる。

当町出土の該期土器は未集成であるが、加曾利E式を主体としつつ曾利式要素の強いものは今までにも多く見られている。碓氷峠を境に信州と接する地域性を考えれば、このことは必然的であるのかもしれない。時期は違うが、前期有尾式土器の要素をもつ土器の出土例も多い。また、後期掘之内式期の柄鏡形敷石住居跡が検出された本町の二軒在家二本杉遺跡では、積石の形態等が長野県望月町のものと酷似しており関連性

が窺われる。これらの状況も中期後半と共通する事象と言えるであろう。また、本町の曾利系土器のあり方については、先出の下原遺跡でも本遺跡に近いものが出土しており、これらを含めてさらに検討したい。

第3節 石器について

検出された石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、自然石による凹石類である。石斧では打製石斧が未報告分を含めて76点と他の石器より圧倒的に多く、磨製石斧は僅かに1点であった。この傾向は下原遺跡でも同じで打製19と磨製3（報告分。磨製は小型の定角式石斧1点を含む。他に未報告の打製石斧片多い）となっている。この差の原因は何か。材料となる原石の入手量、製作にかかる労力・技術、用途の差・頻度、集団における所有者の規制などが挙げられるが、今のところは提示できる根拠がなく今後の課題として認識しておきたい。また、第4章第4節で僅かに触れたが、形状や使用痕などから見た機能・用途についても、石器の主体を占める道具であるからこそ考えてゆくべきである。

石鏃は明確なものが2点出土し、いずれも黒曜石製の無茎鏃である。狩猟具である石鏃が他と比べて少量であることについても、石斧と同様に組成論の一資料として提示するに止めたい。

凹石類については下原遺跡の報文中でその用途に触れたことがあり、単独遺跡での観察所見ながら「木の実割り具（台石）」の可能性の高さを指摘した。本報告では同様の観点からの観察をしていないので言及は避け、別の機会に本地域の凹石類の集成とともに考えてみたい。石器全体での点数の割合は下原遺跡にかなり近く、集計はしていないが町内の他の該期遺跡も近い割合を示すと思われる。中期には加工具である石皿や磨石、凹石などがかなりの地域で均一化してくる傾向があるようだが、本遺跡（及び町）の例もこれに添うものと言えよう。ただ本遺跡では磨石とセットとなる石皿が全く出土していないこともあり、食物の調理・加工とは別用途の可能性も念頭に置くべきかもしれない。

以上、多くの課題を含めたまとめとなった。本町では上信越自動車道の建設に伴う大規模な発掘調査で、膨大な縄文期の資料が検出されており、まもなくその結果が報告されることになるが、今後はそれらとともに上記の検討課題を考えてゆきたい。

〈引用・参考文献〉

- 上原富次「縄文時代」『松井田町誌』1985
- 福島邦男「曾利式土器」「唐草文系土器群」『日本土器事典』1997
- 金子直行「加曾利E式土器」『日本土器事典』1997
- 小林康男「組成論」『縄文文化の研究・7』1987
- 鈴木次郎「打製石斧」『縄文文化の研究・7』1987
- 神奈川考古同人会「縄文時代中期後半の諸問題～土器資料集成図集」『神奈川考古第10号』1980
- 松井田町埋蔵文化財調査会『土塩下原遺跡』1992
- 松井田町埋蔵文化財調査会『二軒在家二本杉遺跡』1992
- 松井田町埋蔵文化財調査会『下増田天神原遺跡』1993

写真図版



表土除去作業



遺跡地遠景（北より）

図版 2



覆土除去作業



平面精査作業



遺物集中部精査作業



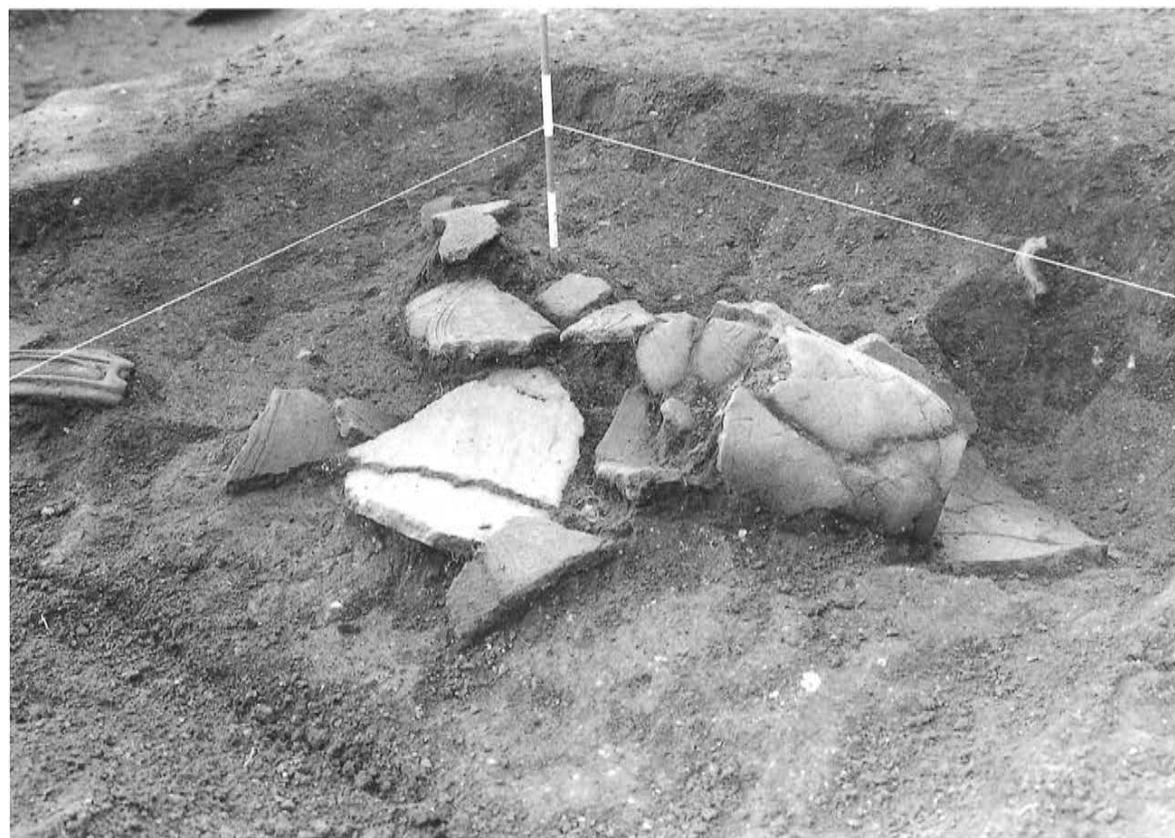
測量作業



遺物集中部 1



遺物集中部 1



遺物集中部 2

图版 4



1



2



15



6



11



3



4



5



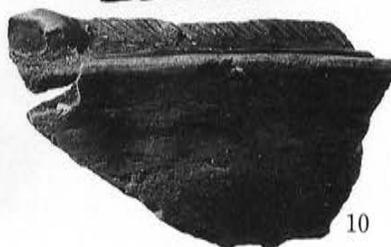
9



7



8



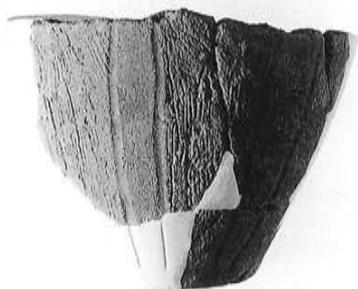
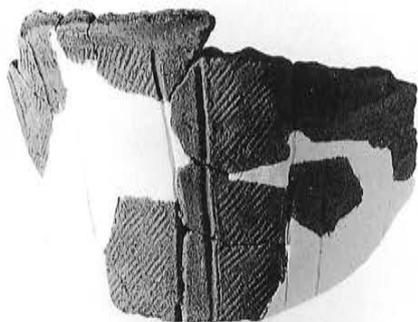
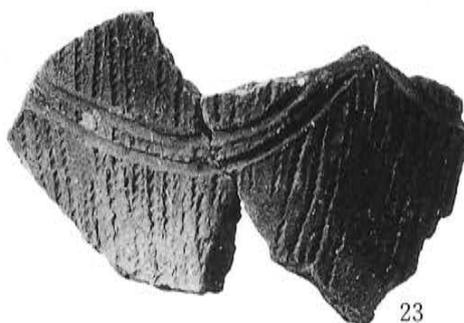
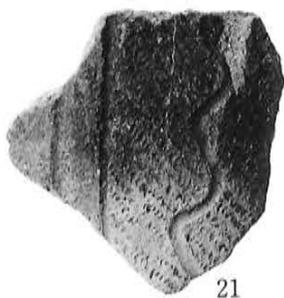
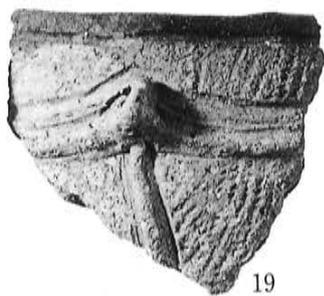
10



12



13





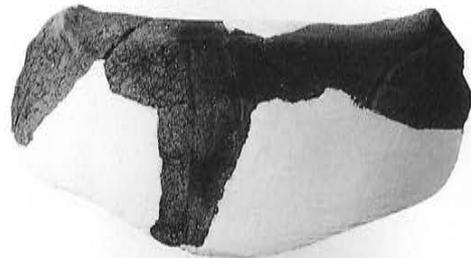
26



28



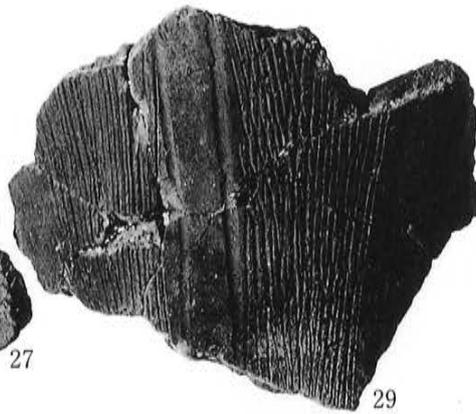
34



38



27



29



30



31



32



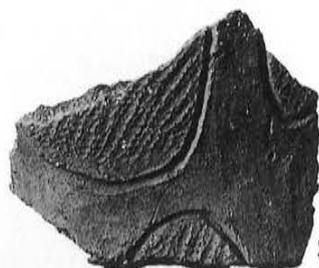
33



35



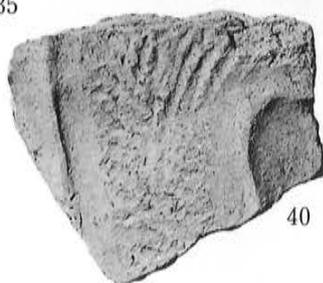
37



39



36



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



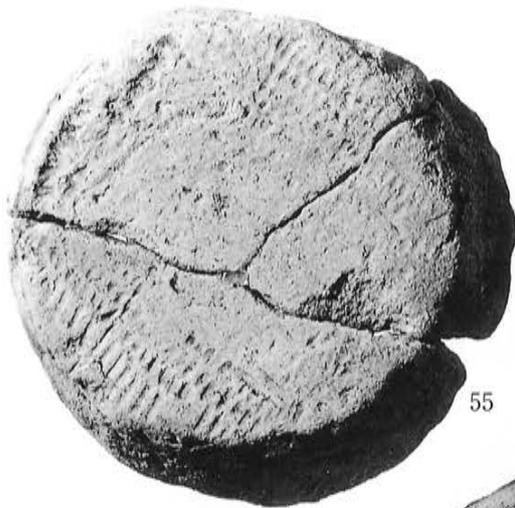
52



53



54



55



56



58



57



60



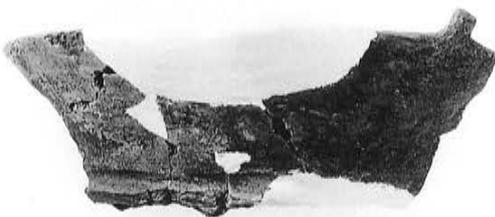
59



61-表



61-裏



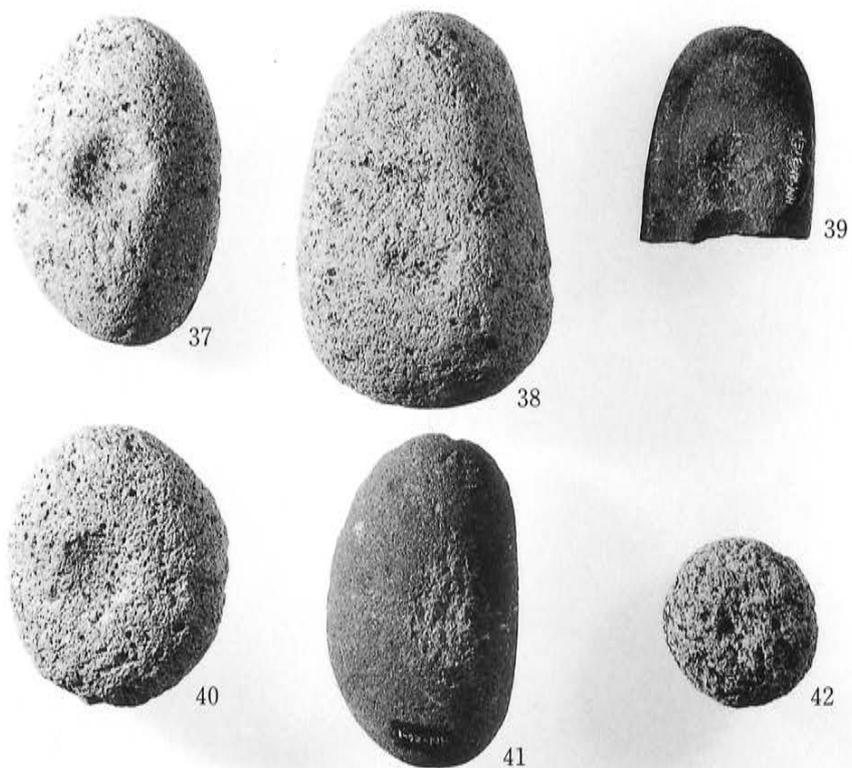
62



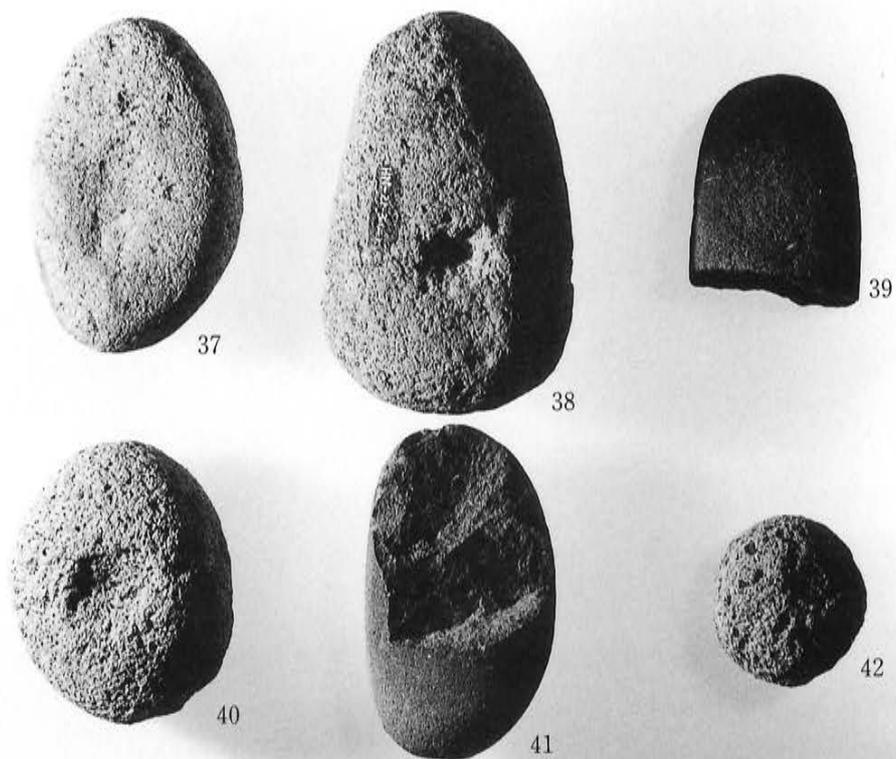
63



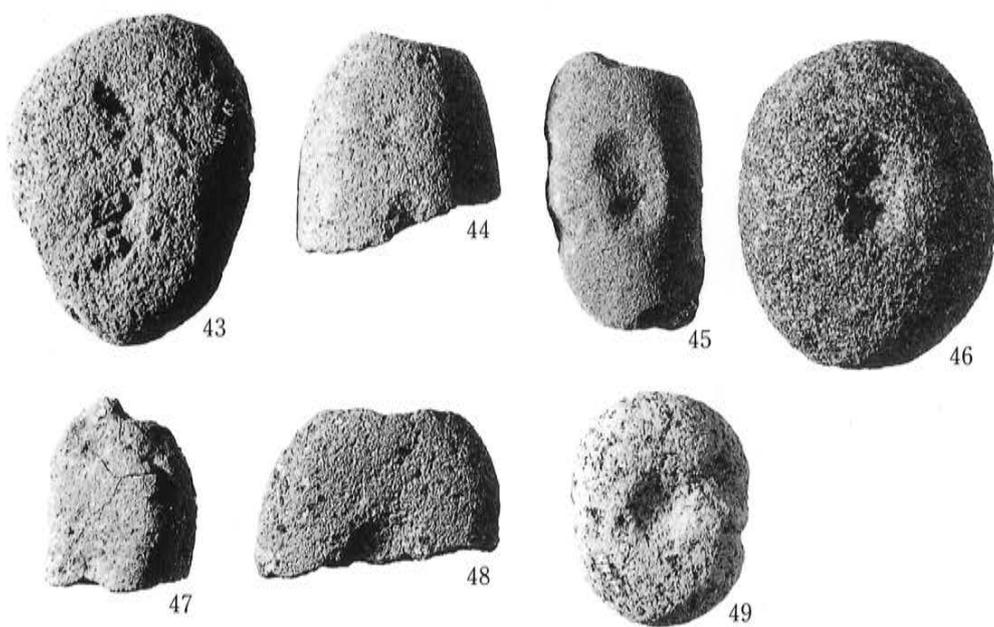
64



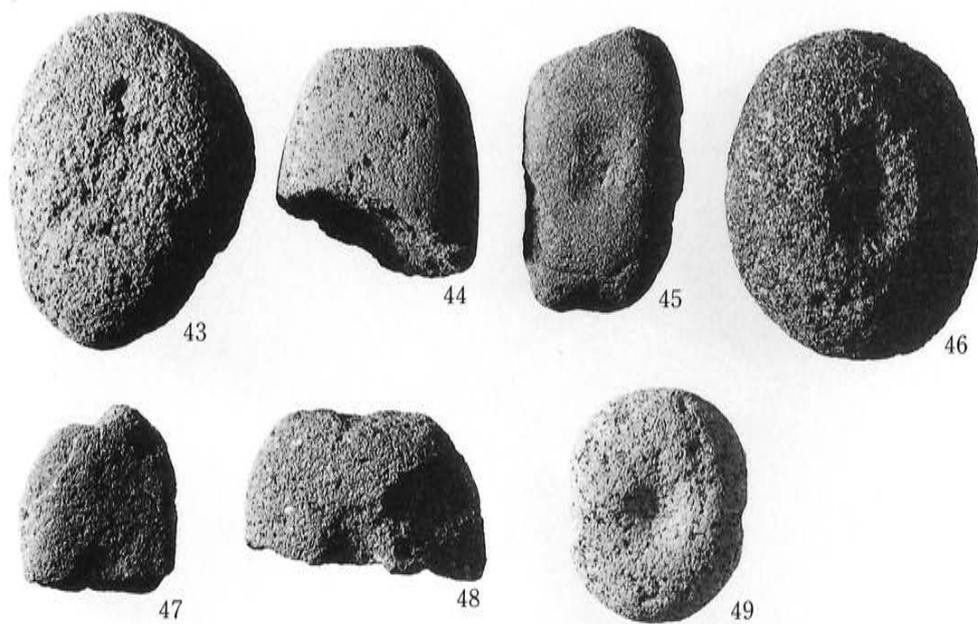
石器37~42 (表面)



石器37~42 (裏面)



石器43~49 (表面)



石器43~49 (裏面)

抄 録

ふりがな	ひじしおにしおおくほいせき
書名	土塩西大久保遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書
シリーズ番号	<7>
編著者名	田口 修
編集機関	松井田町埋蔵文化財調査会
編集機関所在地	〒379-0292 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245
発行年月日	1998年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひじしおにしおおくほいせき 土塩西大久保遺跡	まついだまち 松井田町 おおあぎひじしお 大字土塩 あぎにしおおくほ 字西大久保 601他	104019		36° 20′ 80″	138° 46′ 50″	19950720 19950912	1,754m ²	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
土塩西大久保遺跡	包含層	縄文中期		縄文中期後葉の土器及び石器 (石斧、凹石など)

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈7〉

土 塩 西 大 久 保 遺 跡

平成10年3月31日発行

編集・発行 松井田町埋蔵文化財調査会
(教育委員会内)

〒379-0292

群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245

TEL (027) 393-1111

印 刷 朝日印刷工業株式会社